
ワイリー軍団 in 21 × × 年

黒金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワイリー軍団 in 21xx年

【Nコード】

N7994W

【作者名】

黒金

【あらすじ】

『ロックマン』と『ワイリー軍団』との長き戦いから100年余り人類とレプリロイドが共存する社会の中で、主を喪ったワイリーナンバーズはそれぞれの道を歩いていたが…

『イレギュラーハンターX』の世界でワイリー軍団が生きていたら
のif

プロローグ

『滅んでしまえ』と愚か者が叫んだ。
そして、その通りになった。

22世紀。

失われたものを取り戻そうと電腦化と機械化の進む社会
人と機械の境界が曖昧になった時代

それでも人の業と機械の悲しみが相容れない世界…

夜のネオンが輝く高層ビル群。その日も路地裏からコンクリートと鉄筋の粉塵が舞い上がっていた。

暗い路地裏の向こう、四本足の蜘蛛のような建築物解体用メカニロイド『タイラント』がその巨軀にものを言わせて壁と地面を破壊しながら大通りに顔を出した。

そこへ待ち伏せていた警ら組織『イレギュラーハンター』のレプリロイドが構えていたワイヤーアンカーを発射。

前肢に命中し、レプリロイドの後ろの地面に固定される。

続いてタイラントの後ろで隙を伺っていた小隊が残った後ろ脚にアンカーを撃ち込む。

A班、アンカー打ち込みに成功

B班、確認した。まだビームが残ってる。A級ハンターが到着するまで待機

四肢を封じられたタイラントは身動きの出来ない状態となった。だ

が、安心は出来ない。

今回は明日の作業に向けて待機中だったタイラントが深夜に突如起動し暴走。

付近を警ら中だったハンター達が対処に当たったと言う流れである。最近、特にここ一ヶ月のシティ・アーベルでは日常茶飯事となった光景だ。

この後は攻撃に特化したA級ハンターが応援に駆けつけ対象を破壊するのだが、僅かに遅れてしまう。

余りの事件発生率にイレギュラーハンターのホットラインはパンク寸前なのだ。

その様子を現場から一ブロック離れた高層ビルの屋上で、黒い青年がメカニロイドより感情の無い目で観察していた。

短く切り揃えられた赤毛、端正な顔はバイザーのため表情が見えない。

黒いフードマントに、同色の防弾ジャケットとボディスーツ。首から下は黒という風体である。

屋上の縁に座って通信を傍受していた男はおもむろに立ち上がり、隣のビルの屋上に跳び移った。

何の苦も無くそれを繰り返し、拘束を外れんと暴れるタイラントの真上近くまでたどり着いた。

懐に忍ばせた金色に縁取られた黒い棍を取り出す。そして何の予備動作もなく、タイラントの真上に飛び降りた。

高度50m余り、七層の超合金の背中に勢いを殺さず降りてもナノカーボンの筋繊維とチタンの骨格は耐えきった。

突然の乱入者に驚愕するハンター達を他所に、彼は衝撃で混乱するタイラントの四肢の隙間を縫って接続端末を探し出す。

整備用に取り付けられた梯子に足をかけ、腹にあたる部分の制御盤を見つめる。カバーを棍で剥がすとすぐに焼き切るために腰にあるポーチからコードを取りだし、端末に合わせる。

途中タイラントの振り落としにあったが、何とか接続し回路の焼き

切りに成功。

タイラントは痙攣を起こしたように震えるとすぐに停止した。やれやれと青年はタイラントの背に戻ったが、当然休む暇などなかった。

そこの黒いの！ただちに武装を解除し投降しろ！

黒い警察に似たデザインの指揮官ハンターがスピーカーを片手を怒鳴っている。その後ろにはスタンガンを構えたハンターが二人。ヤバいと舌打ち一つ。壁を蹴りながら再びビルからビルへと移る。町の中心が見え始める頃にイレギュラーハンターの輸送機『ビープライダー』が頭上を通りすぎた。現場に駆けつける予定だったA級ハンターを乗せているのだろう。

降り注ぐサーチライトと黒い威容を無感動に見送ると、光輝く街を見渡す。

夜風が熱が上がった体を冷やしていく。心地好いとは感じない。彼の身体は随分昔から暑さも寒さも感じなくなっているのだからサイレンの音が止めば、シテイ・アーベルはいつも通りだった。

21xx年

ロボット工学の権威、Dr.ケインによって、人間的思考を持つ完全自律型ロボット『レプリロイド』が開発された。

それに伴い、従来通り単純な命令に従うロボットは『メカニロイド』と呼称され区別化された。

この第五次ロボット革命により、第三次世界大戦によって荒廃し、衰退した文明社会は新たに復興を遂げることになる。

だが、その一方で増加するレプリロイド、メカニロイドの暴走及び
犯罪行為『イレギュラー化』が社会問題となった。

多くのレプリロイドを有するシティ・アーベルはこれを取り締まる
為に『イレギュラーハンター』を設立。

戦闘型レプリロイドが製造、配置され、治安維持にあてられた。

『ロックマン』と『Dr.ワイリー』との戦いから、実に一世紀が
過ぎた頃のことである。

プロローグ（後書き）

この話は『ロックマンX』のリメイク、PSPソフト『イレギュラーハンターX』を基にしております。
買ってから続編出してくれCAPCOM…

連続暴走メカニロイド事件（前書き）

ここに出るエンカーはロックマンキラーのエンカーではないので悪
しからず。

ファンの方申し訳ありません。

私はシティ・アーベルが『アップルシード』のオリンポスみたいな
ものと思っています

連続暴走メカニロイド事件

明くる日の朝、新聞の小さな欄に深夜の騒ぎが報じられた。

「これで六件目……」

風情のあるキセルを吹かしながら、これまた風情のある着流しに陣羽織を羽織った隻眼の男が溜め息混じりに紫煙を吐いた。

「先月を合わせて八件。うち半分は『善意の協力者によって解決……か』」

新聞を下ろし、男は僅かにしかめた顔を上げる。

紺色の頭巾に中心に赤い宝石のようなものを填めた巨大手裏剣で何か間違ったニンジャ感なデザインである。はつきり言って何か色々間違ってる。

だが草臥れた中年のような目の奥には機械特有の冷たさと収縮レンズがあった。

「早く事件そのものの解決に至って欲しいものですな。長引くと無茶をする者が後を断ちませぬ」

その目に呆れと半ば諦めを込めて、陣羽織のレプリロイド DWN・24『シャドーマン』は隣で寛いでいる青年を見た。

「そっちのシマじゃやらないよ？」

「どこでされても困ります。エンカー・ザ・ゴールドクロー殿」

無然としながらシャドーマンは再びキセルをくわえた。

エンカー　昨夜暴走タイラントを停止させた青年は懲りた様子もなく、のほほんと笑みを浮かべて返した。

「今まであこぎにやって来たからな。その補填だよ。最近賞金首つてそんなにいないし」

ゴルドク로우（金食い鴉）

三年前突如シティ・アーベルに現れ、死骸を漁る鴉の如く市内はるか周辺の賞金首をほぼ狩り尽くしたことで名を馳せた賞金稼ぎである。

晴天の下、高層ビルの屋上で黒づくめのマント男と時代劇のような格好のレプリロイドは余りに浮いていた。しかしそれを見る者は誰もいない。

「そうおっしやいますか御曹司。何も毎日のように街を巡回して事件を探さずとも良いでしょうに？お陰で組織は楽させて貰っておりますが、仕える身としては毎夜気が気でなりません」

わざわざ彼を賞金稼ぎとしてでなく名でなく、いつもの呼び方に言い直して説教と文句を垂れるシャドーマンだが、相手が笑って流すのは数十年の付き合いで解りきっていた。再び新聞のゴシップ欄に目を落とす。

「ところで、もういい加減俺のこと畏まって呼ぶ必要無いんじゃないか？」

そのエンカーが、笑いを止めて少し真面目な口調で言った。

もう『博士』はいないんだから

暗にそう言っていると知りつつ、シャドーマンは表情はそのまま静かに返した。

「その議論は百年前と三年前に結論が出ております。後にも先にも我々の主になれるのは御曹司だけです」

彼が本名を捨てた理由も、自分達の製作者の跡継ぎを忌避する本当の理由も理解した上で彼は言っている。

エンカーは感情では反論はかったが、シャドーマンの諦めではなく遠くを見るような顔を見て何も言えなくなった。

「……ところで『ゼロ』は？」

無然としながら、話題を変えたのは視線の向こうで見慣れた土煙が見えたからだ。

彼らがいるのはシティ・アーベルの中心に近い区域である。

行政機関はもちろん、警察組織　イレギュラーハンター本部も近い。

昨日の騒ぎの始末が収まらない内に今日この騒ぎである。二人はこれを見に来ていたのだ。

「今見える暴走タイラントの鎮圧に駆り出されているところどころでござる」

「またタイラントか。こないだ責任者捕まってOS全部書き換えたばっかだよな？」

バイザーを最大望遠にして現場を観察。

解体中のビルの中にいるだろうタイラントを待ち伏せるように道路の車や瓦礫に身を隠す数体のハンターレプリロイドを確認。

亜人型レプリロイドが一体　第十三部隊所属A級ハンター『ア

イシー・ペンギーゴ』

赤いアーマーとヘルメットが印象的な長い金髪の第十七部隊所属特
A級ハンター『ゼロ』

後はアンカーバズーカを持った一般ハンターが四体。

その後方で現場を封鎖する警備が多数。突入隊と警備の間に隊長格
のレプリロイドがいた。

緑色のアーマーを纏った巨漢。イレギュラーハンター第十七部隊隊
長にしてイレギュラーハンターの実質的指導者『シグマ』である。

「今回はシグマも来ておりますな」

「ここ最近の暴走事件の頻度は異常だしな。直に確認したいんだろ
うよ。ゼロもいるし」

レプリロイド開発の太祖Dr.ケインの最高傑作としても名高いシ
グマは指揮官としても戦闘者としても優秀な一材である。

後方で指揮を取ることが多いが、部下のために自ら前線で戦う姿勢
故にハンターのみならず市民からの信頼も厚い。

しかもゼロの直属の上司である。その構図が意図するところと経緯
を考えると『兄』であるエンカーやワイリーナンバーズは彼にたい
して好印象を持てるものではない。

が、末弟が記憶喪失であり、監視下とは言え組織内では（能力的に
かなりの封印措置が取られているとは言え）特A級ハンターとして
活躍しており、危険な仕事には変わらないが兄弟の中で一番安定し
た社会的立場を得ている。

今のところゼロを暗殺する動きも無いので、兄弟たちもそれぞれの
形でだが『様子見』で現状に納得することにした。

その代わり、シャドーマンの組織を初め何体かのワイリーナンバー
ズがイレギュラーハンターの内外を偵察している。組織が暴走した
時に備えてだ。

「ところで最近ゼロに相棒が着いたのをご存知で？」
「うん、同じ部隊のB級だってくらいなら」

事件を前に世間話をするように話題を変える二人。

既に『最強』と特A級が二人も動員されている時点で鎮圧は確実にと判断していた。

それに昼まで公務に介入したら流石に手が後ろに回る。

「拙者も直に見たわけではありませんが、そやつのことをアストロから聞いたときは驚きを隠せませんでした。…ふむ、今着いたところのようです」

基本常に冷静なシャドーマンが、百年近く闇の中に身を置いている『怪人』が驚くことはそう多くない。

ふと高高度を飛行するジェット音が義体と機械の聴覚に届く。青空に飛行機雲を書いて飛ぶ紫色のビブレイダー。ハンターを急降下させるためのタイプだ。

そのハッチの一つが開かれる。今まさにハンターが急降下する瞬間だった。

「で、そいつの名前は？」

「正式名称かは不明ですが、皆に呼ばれている名は…」

ハンターがパラシュートもなしに降下していく。狙いは暴走タイプの真上。

次第に件のハンターの姿がはっきり見えてくる。

ゼロとは正反対にヘルメットからフットブーツまで深い青でまとめた少年型レプリロイドだった。

その様子を先程とは違う遠い目で見つめながらシャドーマンはそのハンターの名を言った。

「^{エックス}X[□]」

空中から垂直下に放たれた蒼い閃光。

エンカーにとつてもシャドーマンにとつても、そして全てのワイリーナンバーズにとつて懐かしいその色は、しかし記憶にある輝きの倍の大きさをタイラントを叩きのめした。

目標の沈黙を確認したエックスは再び空中で、ただし横へバスターを撃つとその反動を利用してビル壁に貼り付き地上へと降りた。現場では歓声上がり、ハンター達はすぐに沈黙したタイラントを確保しにかかった。

急いで制御盤を確保して完全に停止させるためである。

だが、そうはいかなかった。

「まだですな」

「ああ、今外部からのマニュアル起動を確認した」

熱源感知でタイラント内部の急激な熱上昇を確認。

再起動!?

確保に近づいたペンギンゴ隊にタイラントの前肢が降り下ろされた。そして一転騒然となる現場。

「…操作系へのハッキングだな。犯人は腕を上げたか?」

「あるいは防壁のコードが流出されたか…ですな」

奴の足を止めるクワツ!

明らかな敵意をもって暴れだすタイラントにペンギーゴが氷を吐いて足を、ハンター達はアンカーで拘束にかかる。

だがタイラントは拘束を力づくで振り払うばかりか腹の下に格納されている巨大アームを伸ばしてハンターの一人を捕らえてしまった。

ゼロ、そちらからジェネレータを狙撃することは可能か？

タイラントには整備用の制御盤のは別に緊急停止用にジェネレータが赤いプラスチックに覆われて露出している。

それがちょうど腹の真下にあるのだ。

駄目です！奴の動きが速すぎて……！？

別方向から近寄ったものの、忙しく動くタイラントの脚を避けながらゼロが苦渋を浮かべながら報告を返す。

ついにアイカメラ横についている一対のレーザー砲で周囲を薙ぎ払いにかかった。

本来建築物の壁を切り取るためのビームが通りに配置されたパトカーをナマスにし、警備ハンター達もろとも吹き飛ばしていく。

射線上にいたシグマは既にその身体能力を活かして高く跳躍して近くのビルの屋上に立った。

そのシグマのもとにエックスの通信が届く。レーザーに巻き込まれないため迂回して現場へ向かう最中だった。

隊長、奴のパワーは予想以上です！私がもう一度奴を止めます

よし、行け！

エックスが配置に着くまで現場から離れようとするタイラントはゼロがバスターを撃って足止めする。

すぐ前面に着いたエックスはバスターを構え狙いをつけた。

だがタイラントを操っている奴は狡猾だった。
エックスの狙いを察して未だアームに捕らえていたハンターを射線
上にかざした。一瞬エックスが動揺したのがわかった。

「ほう、人質とは考えたな……」

機体の損傷を度外視した動きに合わせ、間違いなく今までと同じ犯
人だと確信したシャドーの横でエンカーが無言で立ち上がった。
バイザーの下の緑色の瞳から感情が消え失せ、右手には黒い棍、リ
フレクトスピアの量産型が握られていた。

「ちよつと行ってくる」

口では散歩にいくようで、全身から闘気をみなぎらせている。ヤル
気だ

「まだですぞ、御曹司」

今まさに飛び出さんとする主を静かに制する。

望遠視界の向こうでは何とか味方を傷付けずジェネレータを撃とう
と苦心するエックスと、早く撃てと苛立つペンギーゴが見えていた。
このままではハンター達ばかりでなく市街に被害が拡がるのは火を
見るより明らかだった。

迷うエックスの横をシグマが駆ける。

一瞬のことだった。

彼が人質の片腕を犠牲にしたとは言え、ビームサーベルで頑丈なア
ームを切断し、ジェネレーターを文字通り焼き切ったのは

タイラントは、タイラントを操っていた者は反応する間も無かった。
その迅速で鮮やかな手際に誰もが呆然する中、タイラントは完全に
沈黙。

現場は喝采に溢れた。

「とりあえず一件落着…ですかな」

呟くシャドーマンの隣でエンカーは我知らず安堵の息を吐いた。

現場は後始末と現場検証、負傷者の救助が始まっていた。

「…で、話を戻すがあの青い坊やは…」

「表向きの製作者はゼロと同じDr・ケインですが詳しい出自は不明。しかし容姿の傾向及び攻撃方法、性格の傾向から判断するに十中八九『Dr・ライト』の製作だと見て間違いありません」

Dr・ライト

前世紀の工学史における『ロボット工学の父』

かつて祖父のライバルだった男

随分懐かしい名前を聞いた。最後に会ったのは『あいつ』が死んだ夜だっけ。

視界の先では多分『あいつ』の弟であろうエックスがペンギーゴから「何故即座に撃たなかったのか」と咎められていた。

多分理由を説明したとて合理がモットーのペンギーゴは納得しないだろう。

横でシャドーマンが説明を続ける。

「一年間の訓練期間を終え、半年前に正規ハンターとして登録され、その後実力と反比例してイレギュラー撃破数は微妙ながらもB級として活躍中。シグマの指示で三ヶ月前にゼロと組んだ至りと…まあ、ハンター内部の評価は『あの』シグナスの数少ない友人の一人として変わり者の甘ちゃん扱いというところですね」

とは言え、将来『あいつ』同様自分達の脅威になる可能性は無いわ

けでは無い。

その事を察しつつも、シグマから静かに戒められ諭された後、何か思い悩むエックスの肩に手を置いて励ます末弟の姿を見て思わず頬が緩むエンカーであった。

「…聞いておりますか？」

「聞いているよ。うまくやっていけてるみたいだから、つい…な」

新聞をたたみながら咎めるような目線を送るシャドーマンに冗談のように返すエンカー。

だがその笑顔は本人が思っている以上に穏やかだった。それに再び複雑な思いを抱くシャドーマン。

「あいつの身元引き受け人は？」

「同じくDr・ケインになっております。多分『発見者』ですな」

「…その辺は本人に聞いた方が早いかな」

Dr・ケインがレプリロイドを開発させた経緯には謎が多い。

公式にはDr・ライトのラボ跡を発見し、残された論文や資料からヒントを得たとなっているが、それ以上の情報は開示されていない。

「んじゃ、マグとジエミニに連絡入れたらちよっくらラボにお邪魔してくるわ」

「銃火器は使わぬように」

「使わねえよ」

踵を返してその場を去ろうとするエンカーに釘を差し、「ああ、それと…」と付け加える。

「此度の連続暴走事件…如何見ます？」

クレーン車が到着し、ワイヤーに吊り上げられて回収されていくタ
イラント。

シャドーマンにはそれが不吉の前兆に見えてならなかった。

探偵事務所 M & a m p ・ G (前書き)

ちよつとした幕間です

探偵事務所 M & a m p ; G

シティ・アーベル東地区。

大通りから裏へ少し歩いたところに他のマンションやビルに比べてこぢんまりとしたビルがある。

出入り口には金属のプレートに『私立探偵事務所M & a m p ; G』と銘打たれていた。

その横には紙で「ペット探しから浮気調査まで。24時間対応、料金は応相談」のキャッチフレーズ。

そつちでも停止後再起動したか…

「ああ、そつだ」

部屋の主の一人DWN・19ジェミニマンはエンカーからの通信に応えながらPCのモニターで暗号コードの発信場所とこれまでの事故現場の地図を見比べていた。

「お陰で複数犯によるハッキングだつてわかつてな。肝心のメカニロイドはVAVAがスクラップにしちまったけど」

「いやー、クラッシュ兄に見せたかったぞ。あの壊しっぷり。と、愛銃のマシンガントンファーにマガジンを詰めているのはDWN・18マグネットマンである。」

「ついでとばつちりで吹っ飛ばされたハンターが三人、付近のビルが二練半壊したかな」

呆れたように付け加えるジェミニに通信の向こうのエンカーは眉をしかめる。

先週も建築現場潰したばっかだろ？最近顔見せなくなってから荒れてないか？アイツ

VAVAはA級イレギュラーハンターであるが、全身銃火器と言わんばかりに肩部バズーカにアタックメントアーム& amp; フットと『見敵即殺』を体現した男である。

エンカーもマグ達も事件の関係で『偶然』何度も会う内、言葉少なに酒を呑みあったり、事務所に暇を潰しに来たりする仲になった。たまに奴の担当する事件に介入しちゃったりして追いかけて回されたこともあるがそこはご愛嬌。いつかナパームに会わせてやりたいと思う。

閑話休題。

苛烈な人物には間違いなかったが、三ヶ月前ぶつとり連絡をたつてから行き過ぎたイレギュラー『破壊』が目立つようになっていた。

「この分だと懲戒処分くらってんな……」

それで済めばいいが…と、憂いつつ二人は自分達の出来ることを優先させる。

「ともかく事件中配線の特定をやっていたんだが、いくつか衛星経由でコードを発信してようだ。市内に発信源らしい場所は既に特定してあとは二つだけになった」

「んで今夜辺りにまた事起こすだろうからアタリつけて張り込みに行くわけ」

マグは愛銃の次に携帯用の電腦錠の具合をチェックして用意を整えた。

ジェミニもアームパーツを開放してジェミニレーザーのバッテリー

と実弾のカートリッジを装填する。

「もうハンターの方でも検索は出来ているだろうが…どうもやり口にしてはやるのが幼稚というか…」

「ボコにしてとつちめてから聞き出さしやいいじゃん？」

「お前は黙つとれ」

シャドーは何か大規模な事件の前触れだって言ってたな

「やっぱりそう思うか？つまり今はお試し期間か…」

かつて取った杵柄とは言わないが、似たようなことを何度もやってきたワイリー・ナンバースとしては下手人たちを捕まえて『終わり』とは考えない。

そもシテイ・アーベルに存在する自律型メカニロイドの電腦警戒レベルは最高に設定されている。公的機関の人間でもアクセス出来るのはごく僅かだ。

ただの労働者の腹いせだけではリスクが高すぎる。

昔は俺たちの『仕事』だったのにな…

「言うな。虚しくなる」

ポツリと呟かれた言葉にジェミニは即座に遮った。

そこへ中継通信が入る。コードは024。シャドーからだ。

御曹司、つい先程ハンターの方でコードの送信機関の割り出しに成功した模様です。今夜中に西地区にあるアジトに突入するのとこのとです

三人の電腦に直接ハンター側で行われているブリーディングの様子が映し出される。

今朝中央区での暴走事件の発信源はイレギュラーハンター本部からそう遠くなかった。

「アタリだ」とマグが呟く。

ああ、ジェミニ、マグネット。取り込み中すまんが、一応組織の者を送っておこう。逃げられた時の保険だ

俺も行くのに

「そつちが来るまでに済ませとくよ」

最後に一つ… とシャドーマンは付け加える。

既にシグマがケインラボに向かいました。理由は一連の事件の見解を聞くためかと…

ああ、今後ろで奴さんの車が見えるよ。通りすぎるふりしてから潜ってみるさ

二人は嫌な予感がした。てっきりエンカーが市内から通信を送っているものと思っていたからだ。

「……お前、今どこいるの？」

今バイクでハイウェイ乗って郊外向かってるよ

「先に言えバカ！」

皆さん、運転中の通話は事故のもとなので控えましょう。

シティ・アーベル イレギュラーハンター本部(前書き)

PSP壊れた(T-T)

仕方ないのでニコニコで『Day of 』観ながら書いてます。

台詞間違ってたらご免なさい。

シティ・アーベル イレギュラーハンター本部

エンカーがハイウェイを走っている頃、シティ・アーベル中央区。
イレギュラーハンター本部。

(公式には)十七の部署を持つ高層ビルは十階から上の練が二つに分けられ、白い音叉のような外観をしている。

任務を終えたゼロとエックスはイレギュラーハンター本部へ帰還し、広々としたエントランスに出た。

そんな二人を出迎える謎の飛行物体(ハ)：

「ゼロさん、エックスさん、お帰りなさいですう〜」

「おう」

「ただいま、アストロ」

アストロと呼ばれた浮遊する 口もどきは二人の位置まで降りると挨拶する。

ハンター本部ではいつもの光景だ。

アストロはハンターでもなければ別の部署の職員でもない。

いつの間からか本部の中に出没しだして、七不思議になる前に本部をあげた大搜索の後、いつの間にか副官のシグナスのオプションにされていたのである(本人曰く『拉致されて解析された』)。

最初は「何処で誰が作ったかわからんメカニロイド(?)を本部に彷徨かせるなど…」と喧しく言う者は当然いたが、いつの間にか消え、ケイン博士の鶴の一声で完全に消滅した。

まあ、神出鬼没であることを差し引けば基本人畜無害なので、シグナスの助手兼オペレーター達の人気者として本部に溶け込んでいる。ホント何をやったんだシグナス。

「戻ったか。ゼロ、エックス」

「シグナス」
「げ」

奥の方から黒い軍服姿の壮年レプリロイドがやって来た。噂の副官シグナスである。

性格そのものを表すかのような南極のごとき冷気がエントランスの温度を二度下げる。

それを見てゼロの顔が思わずひきつる。

「ゼロ、何だ？その疫病神に会ったような面は」

「帰って早々嫌な面見りやそうなるさ」

「まあまあ、二人とも」

「子供じゃないんだから…」

剣呑になりそうな赤と黒の間に入るアストロとエックスであった。

「まあとにかく、二人とも今回の任務ご苦労だった」

「いや、俺は…」

敬礼で返しながらも言い淀むエックスにシグナスは溜め息混じりに言った。

「話は聞いている。お前の判断は間違っていないぞ。ただ…自分側からの射撃で人質になった同僚に当たりそうだと思うなら、その場で応用を利かせる。その為にこいつと二人一組ツーマンセルだろ？」

「こいつとか言うな」

「まあ、情報畑の俺が口出しする事じゃないがな」

「……………」

「ドンマイ！ですよ。エックス」

四人は気付いてないが、エントランスにいる受付や道行くハンター達は普通会話している彼らを不思議そうに眺めていた。

彼らからすればシグナスは総監の次の上官であり、日頃の雰囲気も相乗して必要以外話したいとは思わない。

更に言うなら素行の悪かったフレイム某というハンターを、氷づけにして30階から叩き落とすという噂のせいで、更に近寄りがたいことになっている。

閑話休題。

ともかく、シグナスという「冷徹」の体現者が今「友」と呼べるのはエックス達の三人である。本人たちは全く意識してないが

「ところで、今から出るところだったのか？」

「ああ、メーカー側の社長達に事情聴取と被害者の陳謝にな…」

シグナスの顔が人間でいうところ胃下垂に胆石が重なった様なしめめっ面になった。

「被害者って…」

その言葉にエックスが顔色を変えるが、そうではなかった。

「別に怪我人が出たとかじゃない。ただバカな身内が暴れすぎたせいで付近のビルがな…」

「二練半壊だそうです」

「ああ…」

「成る程」

最悪の予想をしていただけに安心していいのか微妙な気分になりながら、バカの尻拭いする羽目になったシグナスに二人は同情した。

「ちなみに総監はレプリフォースとの会議に出席して今はいない。報告書と始末書は勝手にデスクに置いていいぞ」
「始末書書くようなへマするか」

ゼロと憎まれ口を叩きながら、シグナスは玄関口で待機していた送迎車に乗り込んでいった。

「ちゃんと納得いく理由を文章に出せよ？」

「さっさと行け！」

「いつてらっしょい」

副官を乗せた車が発進したのを見届けると、三人は改めてエントランスの奥へ進んだ。

「全く…大体なんで今もタイプライターで作成なんだ？」

「それにしても最近シグナスも本当に忙しそうだね」

「ほぼ毎週事件ですからねえ。あ、エックス。おいらも手伝います」

エントランスからエレベーターに乗って指令室に向かう間、すれ違うハンター達の間ではここ最近のメカニロイド事件で持ちきりだった。

「今日だけで二ヶ所。今月に入ってメカニロイドの暴走件数6件に入るってよ…」

「その件でシグマ隊長がケイン博士に相談に…」

ふと立ち止まり、エックスは考えてこむように呟いた。

「イレギュラーか…どうしてイレギュラーは発生するんだろう？」

その問いはイレギュラーハンターになる者なら誰もが一度は抱く疑問である。

ゼロは少し考え込んでから言葉を選んだ。

「プログラムのエラー、電子頭脳の故障：俺達レプリロイドの造られるに当たったの　　　　　いわば高性能化のツケだな」

「まあ、イレギュラー化した対象を機械として観るか人間の考えに当てはめるかで物議が割れてますけどね……ありゃ？」

アストロが説明を続けようとした時、進行方向から警らレプリロイドに両脇を固められ連行されていく紫色のフルフェイスメットとアーマーのレプリロイドが目に入った。エックスも知ってるハンターだ

「VAVAだ：大方また何か揉め事起こしたんだろう」

「揉め事どころじゃないんですけどねー……」

アストロの呟きからしてビル二練を半壊させたのが誰か知ったエックスは納得した。

確かに彼ならやりかねないと思った。

人々を守るためにハンターはイレギュラーを倒すのだが、VAVAの場合はイレギュラーを『破壊』することに悦びを見いだしている節があった。最近は特にその傾向が酷い。

実際巻き込まれて負傷した同僚は多いし、エックスやゼロも巻き込まれかけたことがある。

その彼が手錠されて懲罰房へと連行されていく。

納得はしても知っている同僚がイレギュラーと同じ扱いを受けると言っのは見えていて気分の良いものではなかった。

「ま、エックスみたいな甘ちゃんもいれば、VAVAみたいなイレギュラーすれすれのやつもいるってわけだ」

そう締めくくったゼロに促され、エックスは自分達の第17部隊の
庁舎に向かったのだった。

この時、エックスは自分の中言い知れぬ小さな不安の正体に気付
けずにいた…

Dr・ケイン(修正)(前書き)

ニコニコ見て台詞を書き直しました。

Dr・ケイン（修正）

シティ・アーベルからハイウェイに乗って一時間。

大戦の影響で今や希少となってしまうた自然の樹木が青々と繁る場所に出る。

その一画にドーム状の白亜の施設を中心とした科学設備が建ち並んでいる。

ここがDr・ケインのラボであり、政府公認のレプリロイド研究施設にして機械工学を始めとした教育機関でもある 謂わば発展途上にある学術都市の中核である。

既にハイウェイから直接入れる交通設備はもとより、衣食住の設備も潤沢に整った場所だ。

その広大な研究施設の一画、豊かな森とシティ・アーベルの遠景が見える位置にケイン個人の生活スペースがある。

アイボリー色の壁紙、ワイン色のカーペット、長いテーブル、清潔なテーブルクロス、小さな暖炉：質素ながらも趣のある調度品の存在と部屋の広さが博士の生活レベルの高さを物語っている。

ただひとつ違和感があるとしたら、木の棚に飾られたブリキ達だ。既に幾つか色が褪せ、何度も修理された跡も見える。

全て、ケインが子供の頃から集めてきたコレクションだ。

「最近、騒がしいようだな…」

全体的に細く痩せこけた面、北欧系の血を思わせる鷲鼻。豊かな眉毛と髭、そして足元まですっぽり覆う青いローブ。

お伽噺に出てきそうな魔法使い、或いは錬金術師の出で立ち。その表現はあながち間違いいではない。この老人が大戦で荒廃した世界を復興に導いた『魔法使い』の一人、ジエームズ・ケインその人であ

る。そしてシグマの生みの親でもある。

テーブルの上の鮭のムニエルにナイフをいれながら、ケインは静かに言った。

窓から柔らかい光が差す中、かつては多くの科学者や政府の高官を招いて議論を交わした部屋には今ケインとシグマしかいない。

レプリロイド工学の第一人者と未だ名高いケインだが、最近では隠遁に近い生活に入っていた。

原因は言うまでもなく寄る年波である。いまだその知性は衰えておらずとも、既にその身は車椅子でもある生命維持装置がなければ話すことすらままならぬほどであった。

「はい、ケイン博士。ここのところレプリロイドの犯罪は増加傾向にあり、大型メカニロイドの暴走も数件起きています」

彼の脇に立つシグマは淡々と報告していく。現状、『最高のレプリロイド』と謳われる彼が相談するのはこの老人だけだった。

「ふむ…」

ケインはナイフとフォークを持つ手を置き、息をついた。そして車椅子の背にもたれかけた。

「……エックスはどうしている？」

「エックスですか…？」

何故エックスの名が出るのか疑問に思いつつ、シグマは真面目に報告した。

「情報分析、行動力、戦闘力、極めて高いレベルを示しています。が…時に悩み、判断を遅らせることがあります」

「『悩む』か…それこそが『X』の最大の特長なのだ」

眉間のシワをほぐしながら、ケインは確信のように言った。

「シグマよ…お前は悩むことがあるまい。私はかつて封印されていたロボット『X』を見つけ出し、その設計理念を利用し、お前たちレプリロイドを生み出した。レプリロイドは人間と同じように考え、行動することができる。」

だが…とケインは続ける。

「深く思い悩むことができるのは、『X』だけだ。それは一つの可能性なのだ。」

「悩むことが欠点でなく可能性であるか？」

「欠点か…普通はそうだろうな」

ケインは小さく笑い、『息子』に対して諭すように続けた。

「だが『思い悩む』ことのできるレプリロイドが、人類にこれまでにないレプリロイドとの新しい関係をもたらすかもしれない」

そう、ほとんどのレプリロイドはその域に到達していない。人間社会での役割を果たす為に情緒アルゴリズム等を制限されているものもあるが、それは技術の限界でもあった。

「しかし、その可能性が希望となるのか、そうでないのか…まだ誰にもわからないのだ」

ケインは一息ついて、遠い目で過去に思いを馳せながら呟いた。

「私はそれを見届けたいと、こうして延命してきたが…」

部屋の中に生命維持装置の排気音が響く。

「間に合わんかもしれんな…」

老いた科学者は絶望と共にその言葉を吐いた。

シグマは何も言わなかった。二人とは別の気配を察していたからだ。足音を殺して窓の近くで銃を構える。

「どうした？」

「静かに」

シグマの言葉に緊迫を読み取ったケインはその通りにして窓から離れた。

復興に伴う高度情報化社会はまだ第三世界に浸透はしていないものの、やはりその反動によるテロ活動や企業による技術スパイは後を立たない。

レプリロイド工学の太祖として最大の標的たるケインと、その最高傑作シグマにとって馴れたやり取りである。

セーフティを外し、勢いよく窓を開け放つ。

だが、そこに人はおらず、ウサギ型のメカニロイド『レイピット』が音に驚いて逃げ出すところだった。

日が傾いた頃にシグマはシティに戻り、再び部屋にはケインだけになった。

窓からの風景をぼんやり見つめるケインの耳に木製のドアが静かに開く音が届いた。

「このところ、目が衰えた代わりに勘が冴えてな…今日はまた誰か
が来ると思っていた」

見えぬ客人に向かってケインは静かに振り向いた。

「で、私に何か御用かね？」

相手は答えない。光学迷彩で姿を隠した客人は老科学者を試す様に
沈黙を守ったが、やがて口を開いた。

『Dr・ライトのラボ、ロックマンXの発掘場所を』

電子合成音声で発せられた言葉にケインは僅かに目を見開いた。

「あそこには最早何も…」

『アルバート・W・ワイリー』

感情の窺えない声は世界が忘れようとした名を告げた。

その時点でケインは相手がDr・ワイリーの関係者だと察した。
大きくは驚かなかった。予感があった。

『資料が目当てじゃない。ただの興味だ』

感情の無い声に懇願が入る。

ケインは目を閉じて考え込み、そして応えた。

「場所は…」

消された下手人（前書き）

カメリーオが平素どんな会話するのか想像つかない…
あと第九の隊長ってどんな人だろう？

消された下手人

「まったく、ゼロさんは鬼です悪魔です」

手動式タイプライターを打ちながらアストロはプンスカとここにい
ない者に文句を言った。

「ビデオコーダーだけ渡して『ちよつと実証したいことがあるから
任せた』なんて、手伝わすイコール丸投げと勘違いしてますう！」

隣で同じくタイプを打ちながら報告書を作成していたエックスは苦
笑いした。

いつも思うが、このメカニロイドは本当にレプリロイド以上に感情
に富んでいる。

「すぐに戻ってくるよ」

「どうぞでしょ」

ブンブンしながらアストロはたどたどしい文章をカーボン紙に打ち
込んでいく。慣れた手つきだ。

それに倣ってエックスも文章を打ち込んでいく。

ふとエックスの手が止まり、彼は考え込むように唸った。

「どうしました？」

「撃てなかったところをどう説明しようかな…って思ってた」

「ああ」

『同僚が人質に取られていたから』と理由にはなるが、エックス自

身が動揺せず冷静に対応していれば、シグマ隊長の手を煩わせることなく済んだのでは…と思えてならないのだ。

「やっぱり俺は撃つべきタイミングを間違えたのかな…」

「そうですねえ…」

エックスは優しい。だからイレギュラー判定されたレプリロイドやメカニロイドに対して撃つのを躊躇うときがある。勿論、市民を守る義務は忘れていないし尊重している。だが、果たして自分達は本当に正しいのか？

それが他の隊員には甘さにしか映らない。

今のところ任務に失敗は無いが、彼の評価はやはり低いままだ。

「ごめん、君にこんな話して」

「いや、でも隊員の安全を優先したんでしょ？例の隊員からもお礼言われたし、皆わかってくれてますよ」

犠牲を覚悟することと犠牲を強いることは大きく違うのだ。

その境界が解らないのではハンターもテロリストも変わらない。

少なくとも、アストロはそう思う。

「シグナスだつて言ったでしょ？チームなんだから一人で解決するなつて。改善するべき点があるにしても、何かに偏った細胞群はいずれ崩壊するってもんですよ」

実際アストロの『兄弟』もかなり偏っていてギリギリである。

今頃、賞金稼ぎや傭兵や闇組織や泥棒をやっているだろう兄弟たちを思い馳せながらアストロはシミジミと言った。

「くよくよする前に、自分のできることで貢献しましょ。報告書の

作成が出来ることもハンターの条件です。人に自分のレポート作成やらせる誰かさんよりはエックスの方が…」

ぶつくさ言いながらタイプを再び打つアストロからちよつと負の念が出ていた。

因みにアストロの言葉通りイレギュラーハンターは報告書の作成で任務中の行動について納得できる理由の記述、及び5Wの文章力も要求される。

もちろん映像記録も提出されるので、虚偽の部分は無いか徹底的に調べられる。

ちなみにシグナスに言わせれば

『イレギュラーハンターは一見破壊活動をしていると思われがちだが、殆どのハンターの場合 そうしなければイレギュラーに逃げられ被害が更に拡がる と判断しての行動だ。別にやりたくてやっている訳ではない。理解したか？理解しろ（ 命令形 ）』
と、わかるように書けとのことだ。

「…でもこれって』というわけでちよつとの被害は毎度多目に見やがれ』って意味に取れるですう」

「俺もそう思う…」

ちよつと青ざめながら改めてタイプを打ち始める二人であった。

自分の出来ることか…

タイプライターのカタカタという音を聞きながらエックスは任務の後、シグマの言葉を思い出す。

『引き金を引くことを躊躇うな。エックス』

背負うものの為にいつか引き金を引かねばならないときが来る。隊長はそう言った。

その時が来た時、果たして自分は撃てるのだろうか？

シミュレーションルーム。

エックスとアストロが報告書を作成していた頃、ゼロはヴァーチャルスペースで隊員を人質に取ったタイラントと対峙していた。正確には昼の任務のシチュエーションである。

これみよがしにアームで捕まえた隊員を前に出し、人質であることをアピールするタイラント。

アームと隊員の隙間から赤いジェネレーターが見え隠れを繰り返し、ゼロは苦心してその隙間に照準を合わせる。

アームの動きとバスターショットの弾速を予測し…発射

『グワアオ!』

胸部に直撃を受けた隊員（仮想）の断末魔と共にバーチャルスペースが解除される。

ザンネン。終了

感情のないインターフェースの電子音声と共に命中率95%と表示される立体モニターが現れ、ゼロは眉をしかめた。

「5%もミスっちゃった…」

攻撃手としては充分すぎる数字だが、「スナイパー」の異名を持つゼロとしては大きな失点である。

やはりあそこは撃たないのが正しい判断だったのか…

そう考えるゼロに聞き覚えのある声がかげられた。

「95%だ、大したもんじゃないか？」

「イーグリッド！」

出口に立つ青い鳥人の姿を見てゼロの顔が明るくなる。

イーグリッド。空中戦専門の第七部隊の隊長その人である。それを示す如く鷲の頭頂の他、背中には立派な翼があった。ゼロにとってはエックスと組む以前からの戦友である。

「お前、ミサイル基地の警備は？」

「無人警報装置が完成したんで守備隊は縮小されたよ。今日から通常のハンター業務さ」

「そっか…」

「で、早速暴走メカニロイド事件の徴収だ。行こうぜ」

二人は道すがら積る話をしつつブリーディングルームに向かった。ゼロの足下の影からの視線に気づかぬまま…

オペレーターが解析した犯人たちのハッキング経路は衛星から初め、国外にある何個ものコンピュータを経由して擬装していたが、結局は市内　西地区16番地にある空きテナントからだった。このアジト（仮定）への摘発にゼロとエックスのチームが先行。後づめにイーグリッド隊、ペンギーゴ隊が突入することになった。時刻は既に夜を回っていた。

一方同じ頃、「派手なことやらかす奴は大概特等席（現場の近く）にいる」と言う持論のもと、それらしい東地区の空きテナントを張っていたマグとジェミニにも獲物がかった。

五人ほどの人相の悪いレプリロイドが車で来たかと思うと、案の定中に入った。そして先頭が似合わぬスーツケースを開けると中には携帯アンテナと何十ものコードがあり、それを据え付けてあるコンピュター群に差し込んでいった。

そして今まで観測したのと同じ周波数の電波。

アタリと踏んだ二人はすぐさま突入した。

もちろんすぐに気づかれたが、武器を取り出す暇はやらない。

ジエミニはセブプロの8ミリで相手の関節を撃ち抜き、残った敵はマグが接近戦で無力化していく。

あつという間であった。二人の特殊武器を使うまでもない。と言っても、特殊すぎて狭い部屋では使い物にならないのだが

「イレギュラーハンターめ！」

「うちは探偵だよ」

喚く相手を次々袋を被せて縛り上げているとき、微かな足音でジエミニが、磁力の変動でマグが侵入者に気付き銃口を出口に向けた。侵入者も対サイボーグ用ライフルの銃口を向ける。

「なんだ、もう終わってる」

侵入者はエンカーであった。

「遅い！」

三人とも毒気を抜かれて銃を下ろす。

「そいつらが犯人で間違いない？」

「今からそれ聞くとこだ」

一人だけ袋を被らされず足で地べたに這いつくばらされたレプリロイドがいた。

マグは懐から電脳錠を取り出し、もがくそいつの送信機器に差し込んだ。

「よし、いいぞ」

糸の切れた人形のように膝から崩れ落ちた犯人の首根っこを掴んで壁に座らせたマグはエンカーに合図を送った。

エンカーは背中中のバツクパツクに入れてあるファイバーコードを引っ張り出すとその端子を送信機器に接続し、電脳内の視覚と記憶野に侵入。回路を傷付けないように解析していく。

「左視野に侵入…」

犯人の左目がチカチカと明滅する。侵入に成功した証拠だった。

『続いて記憶野に侵入成功』

エンカーの声が電子音声に変わる。表層のハッキングはこれで完成した。あとは自白剤ヨロシク真実を述べていく。

勿論これは違法行為である。だからイレギュラーハンターがこちらに介入する前に終わらせる必要があった。そもそもこいつらの黒幕がイレギュラーハンターの手には負えるという保証は無いし、場合によってはシャドーの組織と共に闇へ葬らなければならない可能性がある。未だシティ・アーベルに介入したがるテロや列強は多いのだ。

「まずは、だ。何処でタイラントの暗号コードを手に入れた？」

尋問はジェミニが担当することになった。

『依頼人からだ。大型メカニロイドで騒ぎを起こして欲しいからと、大金と一緒にメモを渡された』

金目当てか。気持ちはわからなくてもないが…三人は内心で嘆息した。

「そのメモは？」

『依頼人からの指示で覚えた後は燃やして捨てた。メーカーが書き換えた後も同じだ』

「ここにある設備は？どこから引つ張って改造した？」

『指示されたパーツを集めて仲間と組み合わせた。闇に行けばいくらでも置いてあるパーツだ』

黒幕は随分慎重と来ている。しかも暗号コードを知ることができるとなると、かなりの地位があるか上級のハッカーだ。

「最後に一つ…お前らの依頼人の名前と特徴を…」

周囲を警戒していたマグの磁力計に変化が見られた。何か近くで動いている。

千里眼より018、019へ。東区ルート43で擬装したハンターと思われるトラックと装甲バンを発見！そっちに向けて進行中、以上

もつ来ているく

シャドーの手の者からの暗号通信を受けてマグはジェミニに暗号通信で伝える。ジェミニも即座に尋問を中断して再び引き金に指をかける。

何かが振り抜かれ犯人の首を飛ばすのと、マグがダイヴ中で動けな

いエンカーのコードを切つて引き倒したのはほぼ同時だった。ジェミニは眼前に飛来した巨大な刺を紙一重でかわし、光学迷彩をした敵に向け発砲した。だが悉くが虚しく壁に当たっただけだった。エンカーを守るために体勢を立て直して銃を構えるマグだが、自分とエンカーの頭に赤い光点があることに気づいて動きを止めた。既に周囲を囲まれていたのだ。

「ににに！いい夜だな探偵ども」

壁に張り付いていた襲撃者は光学迷彩を解除して嫌らしい笑みを露にした。

「カメリーオ…！」

圧倒的不利を悟ったジェミニは銃を床に下ろしながら忌々しげに相手の名を呟いた。

カメレオン型レプリロイド 第九部隊の副隊長スティング・カ

メリーオ。となると周りにいるのは隠密性に長けた第九部隊だ。

シャドーの寄越してくれた面子の数は不明だが、ヤバイことにはかわりない。

地面に座らされ、武装を没収されている間、立て続けに空気の抜ける音がした。

「あー！」マグが声を上げる。先ほど自分達が縛り上げたレプリロイド全員が隊員によって射殺されているところだった。

「てめえ！大事な証人を…」

「黙んなし字磁石。お望みならお前さんの頭に風穴空けてやるよ」

後ろ手を拘束されながらも憤慨して食って掛かるマグを冷たくあしらいつつ「連れていけ」と部下に命じたカメリーオは視線をエンカーに

向けた。

「で？何でここに金食い虫がいんの？」

「ただのボランティアですが何か？あと俺は『烏』だぜ副隊長」

おもいつきり口の端をひきつらせて嫌味をきかすカメラリオにエンカーは爽やかな笑顔で答えた。

内心は手がかりを皆殺しにしたカメラリオの電腦を焼ききりたいほど煮えくり返っていたが

「けっ！申し開きは人間の警察にしな」

しっしつと巨大な手を振りながら部下にエンカーも連行するよう指示した。

「アル！そいつらには何も喋るな！！」

会話の最中マグが始終怒鳴っていたが、結局隊員に下に着いた護送車までひきづられていった。

両手にレプリロイド用の手錠をかけられ、護送車にマグとジェミニが、エンカーは人間の警察に連行するためにと隊員二人の同伴で装甲バンの後部座席に乘せられた。ロボットの二人とは対称的に始終大人しくしていたのには理由がある。

バンに乘せられると同時にゼロの影に潜っていたシャドーから通信が届いたからだ。

御曹司、取り込み中失礼します
シャドーか

両脇にいる隊員に気取られぬよう平素を装いながら、ナンバーズだけの暗号通信で報告を聞く。

「西地区の下手人達が何者かに切り捨てられました。これが現場の映像です

電脳に送られたシャドーの視界映像には先程と似たような打ちっぱなしのコンクリートの床に事切れたレプリロイドたちが転がっていた。
死体の有り様は文字どおり『切り捨てられた』に相応しい有り様だった。

高出力のビームサーベルつてとこかな。ナイフなら腕は飛ばさず首か心臓に一突きすりゃいいし

ゼロたちが突入したときには既に…かなりの手練れの犯行と見て間違いありますまい

こっちは吐かせてる最中にカメライオに消されたよ。タイミング良くないか？<

シャドーの視界が移動する。現場にシグマが到着したところだった。

……奴さん、俺より先に帰ったはずなんだが

これは思いの外、根の深い事件になりそうですな

高出力のビームサーベルを所有し、かつ四人のレプリロイドを抵抗する間もなく切り伏せることの出来る人物は限られてくる。

だが、動機がわからない。

ともかく、この状況を打破せんことには動きようがないから、マ
グたちはアストロに任せよう。こっちは…

既に尾行をつけております

サンキュ

バンは警察署でなく人気がない裏通りに入っていた。消される気配
もあったが、チャンスでもあった。

パチンと何かが外れる音がして隊員たちは連行した男を見た。

『にひっ』と笑いながら自由になった手を見せる男。それが隊員た
ちが見たこの日最後の光景だった。

Bar 『明月』 (前書き)

諸君、『APPLE SEED』と『攻殻機動隊』は好きか？
私は好きだ(何)

今回はオリキャラの嵐かも

Bar『明月』

シティ・アーベル中央区から近い歓楽街の一画。

人気のないビルに『明月』と達筆な筆で銘打たれた酒場がある。

夜は景観の良さと日本風の内装、和食で知る人ぞ知る穴場である。

だが、営業時間外の明け方は閑散としているはずの最上階では物々しい気配に満たされていた。

従業員の人間やレプリロイドばかりでなく、合流したらしいサイボーグや戦闘型レプリロイドが全員武装し、来るべき時に備えて得物のチェックに余念がない。

「揃ってるか？月光」

「おう」

影から現れたシャドーは屈伸して関節を温めているレプリロイド『月光』にちかづいた。彼も顔をあげて返事をする。

10代後半の幼さの残る顔にシャドーと同じ赤い目。同じ忍者の姿がシャドーマンと同系列のレプリロイドであることを示していた。

あえて差異を挙げるなら、頭に被ってるシンプルな鎧兜を模したヘルメットと、派手な赤いマフラー、そして微妙な身長差である。

まあ、そんなことはどうでもいい。（本人は多少気になっているが）首領の『息子』にして代行を務める月光はぐるりと店内を見回した。

「集められる面子は皆来たぜ」

迷彩服と防弾に身を固めた傭兵あがりを始め、時代劇に出てきそうな笠とマントを羽織ったイタチ型のレプリロイド『青竹』、黒い袈裟に数珠繋ぎにした爆弾玉を肩にかけたタヌキ型レプリロイド『赤松』。

少数ながら組織のそうそうたる戦力が揃っていた。

「で、本当に事は起こるのかよ？」

「うむ、確定ではないが念を押すに越したことは無いからな」

ゼロ達が入り込んだ方の犯人グループが持っていたであろうハッキングのデータはことごとく回収された後だった。犯人はすべてのデータを手に入れたと考えるべきだろう。

エンカーがもう一組から読み取った記憶データだけが頼りだが、シヤドーが懸念しているのは工業用メカニロイドの一斉暴走だけではない。

人類とロボットの共存、そのモデルケースとして成立したこの街に潜在している崩壊の要因は数多い。

「ハンターへの警告は済んだか？」

「既に」

「軍に通報した方が早くねえか？」

義眼をしたサイボーグの一人が言った質問に、別のサイボーグとフクロウ型レプリロイドが答えた。

「軍には匿名の予告として通報しておいた」

「ライフライン及び重要施設は奴等に守らせる」

「あとは無駄骨であることを祈るのみ、か」

そしてシヤドーの号令のもと、全員がビルから出撃する。誰にも悟られぬようワイヤーで路地に降り散開。飛行能力の有る者は音を殺して起きかけた街に向かった。

日が登り、街が動き出した時間。シンボルタワーの最頭頂付近に潜伏していた管制特化型レプリロイド　千里眼と万里耳は自分たちの張ったアンテナに例の電波が観測されたことを確認した。

「信号を確認。照合、一致しました」

「視界映像を送ります」

千里眼が見た映像を万里耳が自己の電腦で共有しながら解析し、同時にハンターや敵の信号を解析して街に散らばっている仲間へ送っていく。

彼らの他にも、先に偵察に出た仲間が各方面の映像を送り中継していく。

ハイウェイから望む高層ビル街の二画。

大戦時に廃墟になったビルの解体をしていたタイラントが突然動きを止めた。

それに気づいた現場主任が何か不具合が見つかったのかと近づいた。最近の暴走事件も脅威だが、たまに大戦の置き土産　サリンなどの化学兵器や不発弾が見つかることがあるのだ。

マスクをしてビルの中を見るが異常は見当たらなかった。一緒に作業しているメカニロイドに聞いてみても異常は無いと言っ。

首を傾げていると、タイラントは再び動き出して　猛然と逆走してプレハブの事務所に突撃した。

ハイウェイの防音ガードレールの上を下忍の『月桂』を連れて走っていた月光の視界に吹き上がる粉塵が見えた。

南地区ポイントR786にて暴走を確認。機種、タイラント。続いてルート30にもプレス・ディスプレイが暴走

目の前の惨事を皮切りに次々と報告されるメカニロイドの暴走。『親父』の懸念が現実になったのを実感した月光はこの騒ぎが街の全てに拡大していくと直感した。

「うわわ！？本当に始まっちゃった！」
「急ぐぞ！」

走りながら戦慄する月桂を叱咤し、月光は速度を上げて現場に向かった。

街にけたたましいサイレンが鳴り出したのはその直後だった。

混迷（前書き）

シティ・アーベルの地理ってどうなってるんだろっか？

山は見えなかったから平地だろっけど…

あと何でミサイル基地なんて物騒なものがバイクで行ける範囲内にあるんだ？

ともかく、やっと核心に入ります。

混迷

怒号と悲鳴、クラクションが街を飛び交い、現場を離れた工業用メカニロイドが闊歩するたび市民の混乱を煽る。

既に機動警察やハンターのヘリ及び装甲車がメインストリートを駆け回り現場で対処に当たっているが、もはや焼け石に水の有り様だった。

昨夜逃げた犯人を捜索していたエックスとゼロも、本部に戻る間もなくライドチェイサー（ホバリング式バイク）でいくつもの現場を駆け巡っていた。

ハイウェイから見てもシテイ・アーベルは一昔の戦場と変わらぬ呈をさらしていた。見慣れた街並みは瓦礫と化し、あちこちから火の手が上がっている。

「何でこんなことに…」

「メカニロイドの暴走…俺達を攪乱するためだけのようだが、言葉を使いそうなエックスに反してゼロは冷静に言った（ただし走行中なので電子通信である）。

「犯人の狙いは別にあると？」

「むしろこういってさくさ紛れにやれることは多い…」

誘拐、暗殺、機密奪取、侵入及び潜入、密入国 e t c …歴史を紐解くまでもなく、混乱に乗じて己の利を貪る者は後を絶たない。

「他の隊と連絡が取れないのも気になる。問題はここまでして狙うものが何かだ…」

険しい顔をして呟くゼロの元に本部のオペレーターから緊急通信が

飛び込んできた。

メカニロイドの暴走が始まった頃のハンター本部の地下。また微かな地響きが伝わってきた。その度に暗い独房の天井から埃がパラパラ落ちてくる。

「揺れてんなあ」

「揺れてるな。…しかも今度は近いぞ」

両手両足を頑丈な手錠で固められたままマグとジェミニは呟いた。結局重要参考人という形で拘束された二人は、ハンター本部の地下にある独房棟に無理矢理拘留されたのである。取り調べなどあったものではない。

そしてそのまま朝を迎え、今に至る。

「地震かなあ？」

「磁石ロボットがアホなこと言うな。電磁波の変動が観測されてないし、大体こつても震源が移動してたまるか」

再び振動、何か倒れる音が遠くから響いた。

「やっぱ一斉蜂起つてとこかな…」

「確かに、重機メカニロイドどもが暴れているなら説明は着く」

再び二人は黙り込む。予想はしていたのに防げなかった。これでは例の事件の責任を取らされた身内の潔白を証明して欲しいと言った依頼人への弁明どころではない。何より悔しかった。警察をやっていたロボットの気持ちは今ならよくわかる。

「よし、出よう！」

「どうやって？」

「とりあえず通気孔から……」

「足も固められたままだが？」

探偵二人が不毛な会話をしていた頃、離れた独房で一人項垂れるレプリロイドがいた。

VAVAである。

彼もまた両手両足を拘束され、トレードマークの武装も没収された状態でこの独房にいた。

再び暗い独房が揺れる。だが彼は反応しない。近くの独房にいる知り合いの会話を聞いても全く同じだろう。

電子頭脳に欠陥あると見なし、本日をも以て解体処分。

それが上層部と委員会が彼に下した決定だった。今のVAVAは刑の執行を待つ死刑囚のまさしくそれだった。

だから近づいてくる足音も監守だと思つて気にもしなかった。

唐突に、電子ロックされているドアが開いた。暗かった部屋に光と人影が映る。見覚えはあった。

顔をあげ、影の主を見る。予想通りだった。だから笑ってしまった。

「フン、直々に俺を処分しようか？」

影はシグマは何も答えず、VAVAにビームサーベルを抜き放った。

思わず拘束されている両手を盾にするが、予想していた『死』は来なかった。カラン、と音を立てて切り裂かれた手錠が足元に転がった。

降ってわいた自由に戸惑うVAVAにシグマは言った。

「力を貸せ。『X』を倒すぞ」

足音が聞こえてきた時点で会話を止め壁に聞き耳をたてていたマグとジェミニは、その後続いた会話で自分たちがとんでもない場面に居合わせていることを知った。

とんでもない状況に立たされていたのは独房にいる彼等だけではなかった。

「えーと…」

アストロの手引きで独房棟に潜入した下忍は目の前の光景に呆然としていた。

監視カメラのモニターも弄ってもらった。警報装置も弄ってもらった。自分は光学迷彩を装備してスタンガンと煙幕も用意した。そして表の騒ぎに乗じて潜入してみれば…斬殺死体の山である。しかも監守たちの

思わずどうしたものかと悩んだが、ここで呆けていては様子を見に来たハンターに見つかってしまう。

とにかく彼は機能停止している監守の懐から手錠の鍵束を抜き取る、すぐさま独房の方へと侵入していった。

廊下まで続く死体を避けながら目的の独房まで走り、扉の監視穴から中を伺う。

「助けにきました。今解錠します」

目的の二人はいた。何故か扉のそばに

「待ってたあ！」

「遅い！」

扉を解錠した二人が発した第一声は正反対だったが、目にちよつぴり涙があつた。

「表は若大将が車で待つてます。ただ、街はメカニロイドが一斉に暴れだしてどこもかしこも寸断されています」

手錠の解錠をしながら下忍は報告した。ちなみに若大将とはエンカ―のことである。

「だろうな。こっちにも振動がきている」

「おやかた様たちが対処に向かつてるけど…こっちはこっちで何があつたんです？」

「こっちが聞きたい」

廊下に転がっている監守たちの残骸を見て、ジェミニはそう吐き捨てるしかなかった。

「あゝあ、道理で静かだと思つた…」

死体の前で十字を切るマグの横でジェミニが冷静に死体の損傷部を注視した。

「西地区の連中と同じ死に方だな…」

連行中、護送車の中でシャドーから送られた情報の中に西地区の犯人グループの死亡状況も含まれていた。

それと照合すると完全に一致するのである。二人の中で何かが繋がつた。

「まあ誰がやったかはわかってる…とにかく、ここを出るぞ。説明はその最中だ」

しかしいざ棟から出ようとした時誰かがやって来た。三人は即座に独房の中で身を潜める。

エックスとゼロである。たぶん連絡を受けて駆けつけたのだろう。

二人は惨状を前に一瞬言葉を失った。

「一体、誰が…」

「どれも急所を一撃か…VAVAじゃないな。奴にこれほどの戦闘能力はなかった。恐らく、例の事件の犯人と同じやつだろう」

「じゃあ、そうなるって犯人はVAVAを逃がすためにメカニロイドを暴走させたってことなのか？」

静かな独房棟で二人の声が響く。

下忍は暗がりの中でいつでも煙幕を焚けるよう準備した。

こちら本部。ゼロ、応答願います

「こちらゼロ」

疑問がつきない中、二人の下に通信が入る。しめた、思った三人は盗聴に当たった。

コードの発信源を突き止めたわ！北西部のミサイル基地からよく

「！？向こうに通達は？」

既に通達を送るも応答は無いわ。二人は至急確認に向かって

「了解！」

それと…シグマ隊長と連絡がつかないの

二人は奥の三人に気づかぬまま、本部を後にした。

「ミサイル基地から？」
今しがたタイラントを沈黙させたシャドーはエンカーからの通信に首を傾げた。

警備システムに化けて軍事衛星経由でバンバン電波流してる！止めようにも逆探知ウイルスじゃ間に合わない

あとシグマは黒だよ。真っ黒。さつき監守皆殺しにしてVAVA連れていきやつた！

逼迫したエンカーの次にマグが怒りのまま通信を入れる。アストロが監視モニターを弄る前後にシグマは凶行に及んだらしい。外から連絡を受けた本人がこっさり確認したところ、モニターの監視員も殺されていた。

アストロに余計な疑いがかからなければいいが…
しかしメカニロイドの一斉暴走、それと同時に暴動の煽動。これを機に政府機関の制圧及び占拠を果たすものかと思っただ、いまだその気配は無い。
シグマを追っていた部下から連絡が取れないのを考えて、既に国外に出たか？だが海岸線を張っているチームからその動きがあったという報告は無い。

それと動機も解ったぞ

二人にかわって冷静なジエミニが言った。

「それは？」

『X』を倒す。ひいてはそれがレプリロイドの進化に繋がるんだとき。レプリロイドでエックス（ライト型）ほど可能性を秘めた奴

はいないらしい

努めて冷静な言葉の中に隠しきれない嫌悪が見え隠れした。理由はどうあれ住み慣れた街を破壊された怒りは大きい。

今俺達もゼロのあとを追って基地に向かうところだ。第9の連中からパチツたID使って潜入する。そっちは引き続き、シグマの捜索を頼む

「御意」

千里眼より各員へ。第9部隊の出勤を確認。光学迷彩を展開して散開。尚、隊長格は確認されず

通信を聞きながらシャドーはミサイル基地がつい先日無人警報装置が完成したため守備隊が縮小されていることを思い出した。その目さえ欺けば、すんなり中枢まで入れる…いや待て。ミサイル基地にはまず『何』があった？

「御曹司！！」

シャドーは血相を変えて通信の向こうの主に呼び掛けた。

シャドーの大声で聴覚がイカれそうになりながらもエンカーはアクセルを止めなかった。

「大至急基地に到着次第システム制圧を。だめ押しが来ますぞ！」
何！？

シャドーの後ろの瓦礫の後ろで光学迷彩で姿を隠した者が隙間から銃で狙いをつける。

空気の流れて背後の気配を読み取っていた。弾が顔の横を掠める。即座に間合いを詰め、二射目が来る前に脇で銃を持つ腕を挟み空いた手で相手の喉笛を突き刺し頸椎部を破壊した。機能停止を起こした死体を放り出すと迷彩が解除され姿が露になる。敵は第9部隊のハンターだった。いよいよシャドーは自分の予想の中で一番最悪なものが現実であると確信した。

「ミサイルでござる！」

怒りのままに吐き出す。この状況を作ったシグマに

「暴動でハンター達を釘付けにして、既に奴は街を出て基地に向かってるはずです。まだ奴がハンターなら警報装置は作動しません。あとは発射ボタンを押すだけ……」

成る程、奴さんにとっちゃ勝手知ったる他人の家……

悠長に応える前にアクセル踏め！つか二ト口吹かせ！！

ハンターの車にんなモン積んでねえって！

事務所のローンまだ残ってんだよ！

三人の怒声が通信に響くが、管制の万里耳から再び悪い報告が届く。

武装した第9部隊がSWATの殺傷を開始しました……

シャドーの周りでも既に何人かの第9部隊が包囲網をしようとしていた。どうあっても街から自分達の味方以外は出さないつもりらしい。目の前の連中は間違いなく捨て駒だ。

怒りを静め、彼は首領として部下に命令した。

「各員、聞いているな？全員人命及び民間レプリロイドの救助と保

護を最優先しつつ、何としても街からの脱出路を確保せよ。なお、第9部隊が足止めにかかる可能性が高い。各々の判断に任す」

月光と月桂は、乳飲み子を抱えて逃げる最中瓦礫に頭を打って血を流している女性を介抱していた。

赤松と青竹は暴走メカニロイドを沈黙させ終わったところだった。皆が街のために奔走していた。誰も異を唱えるものはいない。

待て待て！いくら何でも危険すぎる。俺達も避難の手伝いに…

「シグマを止めるのが先です！今のゼロとエックスでは歯が立ちませぬ！」

自分達の身を真剣に案じてくれるのは嬉しい。だが、それより大切なものはある。

それを教えてくれたのは他でもなく人間である主たちだ。

「……………末弟ゼロを頼みます」

歯とハンドルが軋む音が聞こえた。卑怯だと知りつつ、耐えてくれと心のうちで呟く。

主たちのGPS反応が遠のくのを確認してシャドーは彼が正しい選択をしたことを知った。

シグマのアホ！

主の怒りの呟きを聞きながらシャドーは敵陣へ突貫した。

撃つべき敵（前書き）

只今帰省中

いつもより早く投稿します。

撃つべき敵

暗雲たれこめる荒野は恐ろしいまでの静けさをもって不吉の予兆を孕んでいるように見えた。

他国への牽制として作られたミサイル基地には人間はいない。現在は基地内にある管制システムと管理システム。そしてそれらをメンテする少数のレプリロイドだけである。

だが、ゼロたちが入った時にはシステムの駆動音が鳴り響くばかりで、守備隊の姿は一人も見当たらない。

警報装置すら作動した様子もない。

既に内部が制圧されたとみた二人は目配せでバスターのセイフティを外し、警戒しながら中枢へ進行していった。

「よし！まだ発射されていない」

装甲バン（もちろん昨夜奪った第9部隊の備品）で荒野を突っ切ったエンカーはまだ砂が残る発射口を見ながら入り口へ突撃した。

助手席と後部座席ではジェミニ、マグ、下忍たちがミニグレネード、ショットガン、多目的ハンドガン、対装甲歩兵用アサルトマシンなど（一部ボンネットに放り込んだ隊員から拝借した）をありったけ装備して準備に入っていた。

地下には非常灯の灯りだけが存在を主張していた。隅にはそれぞれ赤と青のライドチェイサーが止められていた。先に着いただろうゼロたちのだ。

「ガードロボは？」

「出ていない。セキュリティもハックされてるかもしれん」

ドリフトしながら車を止めると、4人は一斉に基地の中枢へと走り

出した。

何も出てこない静けさが肩透かしどころか、逆に不気味さを増幅させる。

司令室に照明がついているのを見たゼロとエックスは待ち伏せを警戒して扉の両端でバスターの出力を最大に設定、合図を送り突入をかけた。

「動くな！」

司令室にいたのは一人だった。二メートル以上の巨体に緑のボディ、アーマーのレプリロイド…

「「あ」「

バスターをかざした二人から間抜けな声が出た。管制コンピュータの前にいたのが自分達の上司だったからだ。

「ゼロ、エックスか」

「シグマ隊長！」

お互いを確認して両者は手にした銃器を下ろした。

「どうしてここに…」

「本部からここが発信源であることは聞いただろうか？だから私もここへ向かったのだ」

シグマは嘘は言わなかった。エックスもそれで納得し安堵する。

「敵はこの警備システムに擬装してメカニロイドにウイルスを送

信していたようだ」

「成る程、あとは何百もある衛星にアクセスし放題か…」

「今すぐアクセスを切るぞ。お前たちは送信の停止を、私は警備システムの復旧に当たる」

「了解」

二人はマニュアルコンソールで操作に当たり、シグマは奥にあるシステム本体に足を進めた。

「ところでシグマ隊長…」

ゼロがコンソールを打ちながら背中ごしにシグマに切り出した。彼には昨夜からわだかまる疑問があった。

「先ほどから本部とは通信が取れなかったようですが？」

シグマの足が止まるのがわかった。

「敵に通信を傍受される恐れがあったのでな…あえて切っていたのだ」

平素のしゃべり方をしながらシグマは腰にあるビームサーベルのストッパーを外した。

「なに、通信など」

光刃が展開され、イオン臭が空気に満ちる。

「もはや大した意味も無かるっ」

そう言つて、シグマはゼロの背中にむけ凶刃を突きつけた。

「ゼロたちからの連絡は？ミサイル基地の状況はどうなっている！？」

「駄目です！エックスとも連絡が付きません。基地の状況は依然不明です！」

本部の司令室にて指揮を取っていた総監は次々寄せられる悪い報告に齒噛みした。

レプリフォースと共にサイバーテロを予感していた矢先に大型重機メカニロイドの一斉暴走。そこへ加えて第9部隊の反乱である。既に交戦したSWATから死者が多数出ている。

この騒ぎが収束しない限り、人間にとって機械全てが敵と思われる完全に混乱が収まらなくなる。

ハンターの間でも他の部隊との連絡が途絶えていくにつれ、不信感と混乱が高まっていく。

「総監、レプリフォース本部の衛星システムへのアクセス許可を」「何！？」

横にいたシグナスが冷徹な鉄面皮を崩さぬまま進言してきた。

これには総監ばかりでなく通信員も驚いた。そんな中でシグナスは手元のコンソールにコードを打ち込む。すると床から十二基の大型サーバーと送信機器付きの椅子が表れた。

「既に基地のシステムは完全に制圧されていると見て間違いないでしょう」

「シグナス！何をやる気だ？」

言いながらさつさと準備を始めるシグナスに総監は詰め寄ったが、シグナスは着々と自分の送信機器（首の後ろ）にファイバーコードを接続していく。

「レプリフォースの衛星を使って私が基地のシステムを制圧します。至急、先方に連絡を」

司令室にいる全員が息を飲んだ。

「無茶を言つな！そんなことをすれば条約違反では済まんぞ！！」

ミサイル基地は政府及びレプリフォースの管轄にあたる。警備は手伝えど、システムに介入すれば最早越権行為である。だがシグナスは揺るがない。

「お言葉ですが総監。基地の制圧はミサイルの発射ボタンを奪われるのと同義です。他国にミサイルが撃ち込まれてしまえば、国際競争に発展します！」

一瞬のにらみ合いであったが、随分長い時間のように感じた。

「……基地のファイアウォールを突破できるのか？下手すれば問答無用で焼かれるぞ」

焼かれる　一般的にはカウンターウィルスによるサーバーの強制停止を指すが、レプリロイドやサイボーグの電腦でやる場合は脳死を意味する。

「私の全機能をもってすれば」

「うぬぬ…」

総監は後々の追求を予想しながらも号令を出した。

「許可する！通信員はただちにレプリフォースに通達を」

「了解！」

再び司令室が慌ただしく動く。シグナスはすぐにシステムにアクセスし、接続を開始した。

よし、始めるぞ

エックスは目の前の出来事が信じられなかった。

シグマがゼロを後ろからビームサーベルで突き殺そうとしたのだ。

「シグマ隊長！！ゼロ！」

ゼロは寸手で体を捻ってサーベルをかわし、シグマの太い腕を両手で掴んだ。

「ほう、なぜ気づいた？」

今まで見たことないような凶悪な笑みを浮かべるシグマを
元
上官をゼロは必死に拘束しながら睨み付けた。

「西地区の犯人グループの切り口、そして殺された監守達のそれと同じだった…」

高出力のビームカッター類を所持している者は戦闘型でも少ない。ゼロの中で確証は無くともシグマは容疑者に入っていた。そして、その通りになった。

「犯人の戦闘能力、あれだけのことができるレプリロイドは多くない…最初に急所を狙って来るとわかれば避けることも出来た！」

「流星はゼロ、と言いたるところだが、私を全く警戒しなかったエックスの甘さがレプリロイドとして貴重と言えるな！」

愉快とばかりに顔を歪めながらシグマは空いた手でゼロの頭にアイアングローをかけた。

「グアアアアア！！」

「ゼロ！」

万力のような握力で軽々と持ち上げられた上ヘルメット越しに頭蓋を締め付けられ、ゼロが悲鳴をあげる。それでもシグマの腕を離さないのは矜持である。

「シグマ隊長！止めてください！！早くゼロを離してください」

エックスは未だ混乱から抜け出せなかった。

シグマがゼロを攻撃した時、条件反射で銃口を展開しながらも突きつけることができなかった。

ゼロが確実に危険とわかったときにやっと、それでも反射的にシグマにバスターを突きつけた。

だがそれを嘲笑うかの様にシグマは体ごと捻ってエックスと向き合った。当然、ゼロが射線に入る。シグマの狙いを察したゼロが自分をつかむ手を殴り付けて抵抗するが、全く堪えた様子は無い。それどころかますます締め付けを強くされる。

「そうだエックス！よく狙え！私を止めたければゼロの体ごと私を撃つしかない！」

いつか彼がエックスに諭した時の言葉だった。

信じられなかった。信じたくなかった。その思いがエックスのハンターとしての思考を鈍らせていた。

そうと本人が悟った時には收拾がつかなくなっていた。

だからシグマは完全に油断していた自分でなく、まずゼロを攻撃したのだ。

「さあ、どうした！撃つがいい！エックス！！」

いつかと同じ状況だった。ただし人質になっているのはゼロ（親友）で、敵は尊敬さえしていたシグマ（上官）である。

撃てば間違いなくゼロが盾にされる。ゼロを犠牲にするという選択肢を、エックスは選べなかった。

撃てるはずなどできな

「では遠慮なく」

別の声がした瞬間、シグマの後頭部にショットガンの弾が炸裂した。

撃つべき敵（後書き）

やっぱりエックスは足を狙えば良かったんだと思うこの頃。
でもダッシュパーツと同じ機動力のシグマに利くのか…？

矢は放たれた（前書き）

銃器を使うロボットはあり得ないと思う人はいるだろうか？
私はあるだと思う。（だってみんな武器が特殊すぎる…）

矢は放たれた

潜入と同時に監視カメラのハッキングをしたエンカー達は司令室の場所とシグマの居場所を確認し、真っ直ぐそこに向かった。

そしてゼロの悲鳴である。

監視カメラで状況を確認していたエンカー達は扉付近で一瞬の打ち合わせをして行動を起こした。

捕まったゼロ、それを人質にしたシグマ、バスターを向けながらも動揺するエックス。

明らかに不利な状況なのは火を見るより明らかであり、そもそもエックスが身内を撃てるはずもないと言うのが三人共通の見解だった。そこからは早いものである。光学迷彩を展開したエンカーと下忍を先に中に入らせ、ジエミニとマグはシグマへの攻撃にあたった。そういうわけでの

「では遠慮なく」

である。

ショットガンの直撃を受けてもシグマの体には大したダメージは無い。だがその衝撃で前のめりになりそうになる。

視界の端に対装甲歩兵用アサルトマシンを構えた赤いレプリロイドが横切った。頭のU字磁石に覚えはある。

「探偵!？」

返答は銃弾。両手が今塞がっているシグマに九ミリの弾丸が撃ち込まれる。

軍の装甲歩兵を仕留めるために開発されたHV弾頭だが、それでも

最硬度を誇るシグマのボディを抉りはすれど貫通する至らない。だからダメージがあるまで撃ち続ける。

床には大量の薬莖がばら蒔かれ、硝煙が立ち込めはじめた。エックスも堪らず床に伏せて流れ弾から身を守る。

「グオオオオオオ!!」

集中砲火を浴びせられ、堪らずシグマは絶叫するが、膝を折ることは彼の矜持が許さなかった。

それでもやはり窮した彼はゼロを力任せにマグに向かって投げつけた。

「へ?うわっぷ!」

視界を遮られてマグはそのままゼロと衝突した。

自由になったシグマは即座に反撃に転じるべく銃器を取りだし、まづ姿を消してシステムのコンソールを打ち込んでいる者を撃った。

「がっ!」

連射で実弾二発。一発弾が貫通してコンソールパネルを血に染めた。衝撃でモニターに激突し、光学迷彩が解除されるとエンカーはそのまま血だまりに沈む。

「!?!」

「アル!」

シグマが人を撃ったという状況にエックスは絶句し、身内が撃たれたことにジェミニが叫んだ。

職務上の叩き込まれた条件反射でエックスは血だまりで呻く負傷者

に駆け寄った。ジェミニもそうしたかったが、ショットガンが弾切れを起こしたところを銃撃され扉の裏側に追いつかれてしまう。そこで気絶しているゼロをどかしたマグが動いた。再び九ミリを構えて狙うが、それを見逃すシグマではない。

ビームサーベルを振り抜き、袈裟懸けで切りかかる。マグは銃を犠牲にしながらも身を低くして懐に接近した。

電磁力を纏わせ、勢いをつけて拳を振り抜く。独房を出てからこいつは必ずぶん殴ると決めていた。

激突音が広い司令室に響いた。

血を吐きながら起き上がるうとするエンカーと、それを押さえて介抱しようとしていたエックスはその音に振り返る。

マグの拳がシグマの顔に、そしてシグマのサーベルがマグの胸を貫いていた。

最大出力の熱量と電気ショックを体内の磁力発生装置で操作し、頭部への伝播を塞いだ。が、ショックまでは殺しきれずアタッチメントから煙を噴き出しながら崩れ落ちた。

本来の武装であるジェミニレーザーの銃口を展開したジェミニは自分以外が実質戦闘不能になったことに舌打ちしつつ、照準を定める。

「動くな探偵！」

鋭い声と共にシグマが動けないマグに銃を突きつけた。

「隊長！！」

目に涙を浮かべながらエックスは怒りに叫んだ。目の前で死にかけた人間がいるというのに、全く顧みず凶行を止めない。人命最優先を、何より守るべきものの尊さを自分に伝えてきたシグマが、である。

「ミサイルの目標地点…」

エックスの腕の中で口から血を吐きながらエンカーが言った。

「本当にシテイ・アーベルなんだな…」

その言葉が何を意味するのか、エックスでもすぐに解った。だが自分の肩を支えに起き上がるうとする彼を見て必死に押さえつけた。左手が一気に血に染まる。

「喋っちゃ駄目だ！今すぐ組織閉鎖を…」

「ったく、信じたくない気持ちにはわかるけどよ…武装を解除しちまうのはどうかと思うぜ？」

撃てないと諦めていたエックスは自らバスターのアタッチメントを外してしまっていた。いまの彼は右肘から下が無い状態だ。

口の間隙から苦しげな息を漏らしつつ、「だから乱入したんだが…」と付け加える。悪態をつきながらも心の底では納得し奇妙な安心を覚えていた。

仕方ない。仕方ない。『あいつ』の弟だもんな。

だが、そんな彼の懐想を知らぬエックスは自らの甘さを心底呪いながら必死に彼を説得した。

「早くしろ！動脈出血なんだぞ！！」

瀕死でありながら尚も戦意を失わぬサイボーグ（人間）とそれを涙ながら助けようとするレプリロイド（機械）。

皮肉な組み合わせだとシグマは無感動に思った。これではどちらが人間で、どちらが機械かわからない。人が機械に近づき、逆に機械が人に近づいていく現代の象徴のようでさえあった。だが、今のシ

グマが目指す光景ではない。

「…そうだエックス。お前はそうなのだ」

無表情にシグマは懐から何かのスイッチを取り出した。全員が嫌な予感に青ざめた。

「その男の言う通り、基地にあるすべてのミサイルがシティ・アーベルに向け発射される。我々の街だ」

コンソールから上のシャッターが解放される。並べられたミサイルがウインドウ越しに物々しい姿を現した。それらが全てサイロに上げられ、発射体勢に入る。

「そして、私の手の中にその発射装置がある」

見せつけるようにシグマはキーボタンの蓋を解放した。

「引き金を弾くの躊躇うなと言ったはずだ、エックス。私を止めるチャンスは二度あった。私がゼロを盾に取ったとき、そしてこの探偵たちが私の動きを止めたときだ。」

「何故こんなことを…！」

シグマを睨みながらエックスは絞り出すように叫んだ。腕の中ではエンカーがひび割れたバイザー越しにシグマを睨み付けていた。

「我々の未来のためだ！レプリロイドの真の可能性を試すために必要だったのだ！」

エックスは愕然とし、エンカーとマグの眼に更なる怒りが宿った。

「墜ちたな十七部隊長。あの街には今この瞬間でさえお前さんを信じて戦っている奴等がいるってのに……」

銃口を微動だにさせず照準し続けるジェミニにも隠しようの無い嫌悪と怒りが浮かんでいた。

「…協力してくれた全ての者たちにも言おう。エックス…犠牲の無い進化など」

シグマの親指が動く。

止めようとエックスは無我夢中で飛び出し

失血で代謝の維持が出来なくなったエンカーはシグマを睨みながら崩れ落ち

このクズにもう何も言わずまいとジェミニは殺意を籠めてレーザーをはなった。

「無い」

だが、間に合わなかった。

そして矢は放たれた。

シティ・アーベルの混乱はケインラボからも見て取れた。いつも見慣れた摩天楼の間に黒煙が立ち上り、ヘリが飛び交っている。

ケインもまたいつもの自室でその光景を目にしていた。

「Dr・ケイン。貴方も早くシエルターへ避難を……」

警備を務めているレプリロイドと教え子の一人が彼に避難するよう促す。

「私はここで見届ける」

だが、ケインは頑と拒んだ。

「なりません！ここもテロの標的にされる可能性があります」
「博士……！」

今更この死に損ないに何を望むのだろうか？ケインはそう思いながら手の中にある古いブリキに目を落とした。

「ファイアオール第6、第7解除！」

「レベル3、レベル4解放。レベル5の攻略に移ります」

「第4階層クリア」

「サーバー eight、ダウン。nineに引き継ぎ作戦を続行」

「全システムクリアまであと128秒」

ハンター本部、指令室。

全オペレーターの半分以上が次々と基地システムの制圧状況を報告し、高速で渡される情報を処理していく。

既にシグナスの周囲のサーバーは12基のうち8基がオーバーフローを起こし機能を停止させている。シグナス自身も既に高温の状態となっていた。

オペレーターはもちろん、レプリフォースからのバックアップもありまだいけるが危険な状態である。

いざというときは、本部にいる避難者達と非戦闘員を地下シェルターへ避難させねばなるまいと総監は考えていた。

既に政府機関及びライフライン関係にはミサイル発射の可能性を通

達してある。あとは止められるかどうかだった。
市内を衛星でモニターしていたオペレーターのディスプレイに警告表示が映し出される。

「これは…！？ミサイルが発射されました！」

オペレーターは悲鳴のような声で報告した。

衛星は十何発ものミサイルが天高く飛翔するのを映していた。

「すぐに軌道を予測を！判明し第目標地点に通達しろ！」

「了解！」

オペレーターたちは即座に対応して予測計算し直ぐに弾き出した。

「目標は…シティ・アーベル…！？」

着弾予測時間45秒。オペレーターが青ざめる中、ディスプレイは無慈悲に表示した。

基地よりミサイルの発射を確認！

路地裏で第9部隊の隊員を殲滅したシャドーは狭い青空に何本もの白い航跡を見てそうと知り歯噛みした。

「間に合いませんでしたか…」

同じ頃、青空を切り裂く白い航跡を月光も確認した。ちよつど運送トラックのおっちゃんを捕まえて怪我人や避難する人間を荷台に乗せて市外へ脱出する最中だった。

「みんな！頭を伏せてくれ！！」

荷台では重傷人やそれを介抱する同乗者、赤ん坊を抱えた夫婦。足を負傷したレプリロイド、ショック状態で動けなくなった者などでごった返していた。

「おい！降るかもしれんって言ってたミサイルってあれか！？」

「いいから路肩に停めろ！このままじゃひっくり返るぞ！！」

ケインは思い出す。最初はブリキの玩具だった。両親からのプレゼントで、大戦の最中において不安ばかりだった少年の心を支えてくれた。

もうひとつは、今や顔も覚えていない祖父母が語ってくれた「心」を持つロボットと共存していた時代の話。悪の科学者と正義のロボット「ロックマン」の話は何度聞きせがんだ。

人間と機械が仲良く共存する世界
兵器として運用され調整されたロボットしか知らない彼にとって祖父母の時代は理想郷に思えたのだ。

人類のパートナーとしての機械生命体。いつしかそれを理想として彼は工学者となり、失われた過去のロボット技術の復興に奔走した。そして彼は失われた遺産を発見し、技術を復活させた。

夢は叶った。そのはずだった…

千里眼はその場から逃げ出したいのを堪えながら近づいてくるミサイルを視認し続けた。傍らの万里耳も逃げない。

ここから45秒以内に地上に降りて避難するなど不可能だ。二人は管制として腹をくくった。

「人より創られ、人を越える可能性を持った者…」

最初に作られ、最後は発狂し処分されたレプリロイド。シグマが完成するまで機能を停止させていった我が子たち。

「ヒトの傲慢か…それとも…」

ヒトを魂の道具にするなど自分を非難し去っていった者。

ストレスで発狂し、失敗作として処分されていくレプリロイドたちの姿に耐えきれず道を捨てる者。

多くの者がケインの下を離れた。

そして、シグマ

着弾…！

万里耳の報告を聞きながらシャドーは目を閉じ、一方ミサイルを見て悲鳴をあげる荷台の人たち。そして己の無力に歯噛みしながら月光は迫るミサイルを睨み付けた。

人類のパートナーという理想を求めていたはずが、いつの間にか人間以上のヒトガタを創る狂気にすりかわっていたのか？

メッセージとして遺された映像に映るDr.ライトを思い出す。

憔悴し、やつれきった老科学者 正に今の自分そのものだった。

「ヒトの業か…」

『無限の可能性』を知的好奇心のまま解き放った報いかもしれない。

閃光が研究所を呑み込んでいく。この日、レプリロイド工学研究所
通称ケインラボは崩壊した。

X II 無限の可能性（前書き）

送信失敗につき未完成に、つーことで母のパソコン使って修正

X II 無限の可能性

「全てはお前が招いたことなのだ、エックス」

ミサイルが飛び立ち、不気味なほど静かになった司令室にシグマの
声が響く。

「無限の可能性を持つ お前の存在がな」

エックスの腹をサーベルで貫いたまま、シグマは言った。エックス
はサーベルの電気ショックで血に濡れた手を伸ばし立ったまま硬直
していた。

ジエミニもまた、撃ち返された銃弾が手首から肘が貫通したためバ
スターを破壊されてしまった。彼が撃ったレーザーは避けられてし
まっていた。

マグは意識があるものの、ダメージで動けず。エンカーは血の海に
突っ伏している。

最早シグマを止めれる者はいないかに見えた。

それらを見遣り、シグマは再び動かなくなったエックスに視線を戻
した。

「エックス…貴様はそれまでか？」

無表情のまま、動かなくなったエックスに問う。

「いや違う。これから始まるのだろうか？我々の世界が！」

…ス。…ツクス。

電磁ショックで意識を落としてしまったエックスは、遠くで誰かが名前を呼んでいることに気づいた。

『エックス』

目を開けると、白い豊かな髭を持った老科学者が優しげな目で自分を覗きこんでいた。

周りには古い型の設備が並んでいた。ここは何処だろう？

『あな…たは…』

胸までしかない状態でカプセルのようなもの寝かされている自分は老人に問うた。

すると老人は嬉しそうに答えた。

『私の名前はトーマス・ライト。お前の生みの親だよ。エックス』

『X…それが…私の…ナ…マ…エ…』

『X…それは無限の可能性を意味する名前だ』

ここでエックスは今見ている光景がメモリーパックに封印されていた過去の記憶だと悟った。

『お前は自分で考え、行動する新しいタイプのロボットになるんだ』
『よ』

再び意識が落ちる。出力不足だろう。

ノイズ。

そうか…あいつとロールちゃんがいなくなった後に、トムじいさんはお前を創ったんだな…

知らない声が響く。誰かが自分の記憶野にアクセスしている。

誰だ？知っている気がする。でも思い出せない。

その間にも場面は変わっていく。自分が組み立てられていくにつれ、情報としての知識の他にライト博士は多くのことを教えてくれた。

人間のこと、エックス自身のこと、他者を思いやること、命のこと、正義のこと、そして 希望のこと。

いつしか自分が完成して世界に出るとき、どんな未来が待っているのだろうか？

そんなことを考えながら、カプセルの中のエックスは日々膨大な調整を受け続けていた。

再びノイズ。虚ろな声が響く。

見たことない都会の夕暮れ。心配そうに自分を見上げる黒髪の少年。屈託なく笑うポニーテールをした金髪の少女。誰だろうか？

それらがフラッシュバックのように流れていく。これは自分の記憶ではない。アクセスしている者の記憶だ。なのに、自分の奥底が刺激されるのは何故だろうか…？

だけど、世界は優しくなかった。大戦が始まったんだ

場面が変わる。

周りがいつもより暗い。夜だったのだろう。この頃エックスは組み立てが終了し、あとは微調整を残すのみとなっていた。しかし、そ

の日会いに来た博士はやつれはて、憔悴しきつていた。いつもと様子が違うことを、外の様子を知らないエックスでもすぐに察した。

『博士：今日はお疲れのようですが…』

『エックス。お前は本当に人間のようだな…だがそれだけに…』

ライトは苦しげに息を吐きながら悲しげに俯いた。

『お前のように自分達に近い存在を受け入れるには、ヒトという種族は幼すぎるかもしれん…人々はお前の無限の可能性を危険と判断し、あるいはそれさえ利用するかもしれん』

このときのエックスはラボの中はおろか、カプセルから動いたことはない。

だが、自分の意識のない間博士が自分に関係することで何かあったのは予想できた。

『 X という名は危険性をも表すのだ』

知っている。その為に自分は戦闘用に作られ、バスターを装備されていることを。そしてそれがどれだけ恐ろしい力かも。

暗転。

場面が変わり、夜。最後の日だとわかった。

『すまないエックス…。お前を世に出してやるには、時間が足りなかった…』

更にやつれたライトは、掠れた声で最後の『息子』に詫びた。

そこまで言うと、ライトは咳き込んだ。呼吸の中に砂のような音が

混じっている。呼吸系の異常は明らかだった。

『ライト博士！』

『わしはお前に悩み考え、進化を戦いとる力を与えた。だが、それをまだ解放するわけにはいかないのだ』

それは実質の封印宣告であった。だが、エックスの中にあつたのは恐怖でも怒りでもなく、一つの決意だった。

『博士。私はこの力を正しいことのために使います！希望のためにバスターを胸にかざし、エックスは誓った。自分の危険性を諭されてから考え、決めていたことだ。』

『ああ、もちろんわしもそう信じている。お前がその正しい心を持ち続けるということ。未来の人々が…世界がそう願うことを…』

ライトは心から嬉しそうに笑った。

カプセルの蓋が閉まる。二人の顔に悲しみはない。未来への希望を胸に別れを告げる。

最後に残った菱形の窓にライトが顔を覗きこむ。

『博士…』

『さらばだ、エックス…ワシの…未来の希望よ』

それが最後の別れだった。光が遠退き、意識が暗闇に落ちていく。自分が封印された瞬間を見たとき、ノイズが溜め息をついたように聞こえた。

…相変わらず重いものを背負わせるな。トムじいさんは

そんなことはない。悲しげに、皮肉げに言う声の主にそう言いたかったが、自分の意識は落ちたままだ。

全てが変わった。全てが手遅れだったく

その通りだ。

過去の記録は殆ど失われ、大戦は終われどいまだ世界には火種が燻り続けている。

戦災復興と理想社会実現のために生み出されたレプリロイド。だが軌轢は絶えず存在し、イレギュラーハンターという矛盾を生んだ。そして、シグマの凶行。自分は判断を誤り、出さずにすんだ負傷者を出したばかりか、ミサイルが街に撃ち込まれるのを止められなかった。

・・・だけど、全てが失われたわけじゃない

声は小さいながらも確信がこめられていた。

すまない、トム爺さん

ここにいない者に、声は懺悔した。

すまない、ロック

最後に、彼は自分に謝った。

すまない、エックス。せめてお前が戦わずに済むようにしたかったけど・・・

着地とともに床を蹴って加速、シグマに突貫する。今度こそ左手が、シグマの顔面に食い込んだ。熱量が人工皮膚を一気に焼きはがしていく。

「又オオオオオツ!!!」

絶叫。

その際にジエミニは無事な左手で予備に控えておいたミニグレネードを携えてエンカーの下へ駆け寄った。

「オオツ!!!」

渾身をこめてシグマは袈裟懸けを見舞う。エックスは飛びのいて回避し、両者は身構える形で対峙した。

致命的でないにしろ、シグマも無事ではない。両目の失明は免れたが、額から頬にかけて縦一文字に生々しい火傷がそれぞれ刻まれた。

「エエツクスウウウウ!!!」

屈辱か、怒りか。怨嗟に似た咆哮が広い司令室に轟いた。そして、その片隅でコードを引き抜く軽い音が聞こえた。

「若大将！御曹司！ミサイルの安全装置作動に成功！街は無事です!!!」

ずっと姿を消してシステム操作のバックアップに専念していた下忍が、涙声でエンカーに報告した。青ざめ血に濡れたエンカーの顔に小さくも満足げな笑みが浮かんだ。

遙か彼方で巻き上がるきのこ雲を見ながら、月光は運転手共々呆然としていた。

ミサイルは確かに降って、地上に着弾した。だが爆発は起きなかったのだ。

「外れた・・・？」

万里耳から情報が届くまで、彼らは道路に立ち尽くしていた。

「システム制圧完了。ミサイル、17基中16基の安全装置作動に成功。被害は軽微です」

「メカニロイドの暴走停止を確認！」

オペレーターの報告を聞きながら、シグナスは熱で意識が飛びそうなのをこらえて体からコードを引き抜いていった。

横では出火したサーバー郡に気づいたオペレーターが消化剤をまいていた。いつそ自分にかけてほしい。自前のラジエーターは既に限界だ。

目の前では総監が冷静に指揮を取っていた。

「・・・ハンターたちとの連絡は？」

「ただいま障害電波の解除に伴い第1から第3、第5部隊から応答がありました。指示を求めています」

「第15部隊から応答あり！」

次々と復旧する連絡に安堵しながらも、喝采は上がらなかった。

「総監・・・ケインラボとの連絡が・・・」

最初のミサイルはラボに着弾し、施設を破壊してしまっていた。通達はしていたので職員は全員避難しているはずだが

「救助隊を編成に向かわせる。レプリフォースのジェネラルと外線をつなげ。市内に落ちたミサイルの撤去処理のチームを編成する。残りのハンターたちは引続き市民の誘導と救助に専念しろ。ただし連絡を取り合うことを忘れるな」

「了解」

総監は動けず煙を上げてオーバーフローを起こしているシグナスに近づいた。

「お前の言うとおりになった……だが、よくやった。残り65秒を1秒に短縮するとは……」

「……まだですよ。今回は犯人にとって前哨戦です」

「今は休め。誰か、シグナス副官をメデイカルルームへ」

「オイラが連れて行きますう」

後ろから声がして振り向けば緑の浮遊物体　アストロがいた。
もはや誰も「いつの間に」とは言わない。

「いや、お前は……」

「ああ、オイラならすぐに終わりますんで。じゃ」

そう言ってアストロがシグナスに触ると一瞬で二人の姿は掻き消えた。全員が目をむく中、オペレーターの1人がメデイカルルームに彼らがすでに着いたことを確認し、報告した。

瞬間移動ならぬ亜空間ワープ。道理で組織を挙げて捕まえようとして出来なかったわけだ。一つ謎が解けたところでその場にいる全員が謎の脱力感に見舞われた。

「あの・・・総監。外線、繋がりました」

「こちらへ回せ・・・」

システムの指揮権が移動しました。火器管制を閉鎖。セキュリティ作動、全ブロックを閉鎖。施設内の職員は速やかにシエルターへ避難してください

「なにつ!?!」

基地のインターフェースのアナウンスを聞いてシグマは狼狽した。先程の忍び型メカニロイドの言葉から判断するに、基地のシステムは死に掛けのサイボーグに完全に制圧されたということだ。自分たちは閉じ込められてしまったのだ。目的の半分は挫かれてしまった。

「シグマア・・・!」

そして、目の前には真の力を発揮したであろうエックス。損傷していてもその能力が未知数である以上、ここを切り抜けられるか予測できなかった。探偵の1人も隙あらばとミニグレネードを照準している。

だが、予想していた猛攻はこなかった。突然エックスの身体がオーバーフローを起こし、緊急停止してしまった。水晶体と目から光が消えていく。エックスは立ったままの状態で一時的な形の機能停止を起こしてしまった・・・

沈黙。シグマの中に去来したのが安堵か、エックスへの畏怖かは定かではない。

だが、恐ろしいまでの「可能性」を見たシグマは長いようで短い沈黙の末、彼の顔に歪んだ笑みが浮かぶ。

Day of (前書き)

ニコニコ何度も見直した私って…
とりあえず主人公本名がやっとなり判明です。

Day of

夕暮れのシテイ・アーベル。

ミサイル騒ぎはあったものの、メカニロイドの暴走がピタリと止んだお陰で街の混乱は収まりつつあった。ミサイルの回収撤去も進んでいる。

街にいる人間が紛争を掻い潜った経験のあるタフな人種が揃っているのもあるが、今のそれは気の抜けた沈黙であった。

今でも消火作業が終わらず、消防が街を駆け回っている。

建造物の破壊も著しく、病院の屋上から見える眺めは紛争によって廃墟と化したそれだった。

「大気圏に突入直前に信管の安全装置作動。市街の崩壊は免れたか…シグナスも流石だが」

右腕を吊ったジェミニはポツリと言った。

「…ラボに落ちたのが間に合わなかったのはわざとか？」

「まさか」

屋上の縁に座り、無表情で街を眺めていたエンカーは答えた。胸に包帯とナノマシン活性装置が取り付けられていた。

「単純に間に合わなかっただけさ。それだけ奴は本気だったんだよ」
「まあ、全員シエルターに入っていて無事だったらしいがな」

ケインラボは直撃を受け吹き飛んだが、ケインを始めとするスタッフは全員避難しており、無事救助された。

しかし、首謀者がシグマだと判明したことにより、彼らの責任問題

の追求は避けられないだろう。

ハンター組織も未だ半分近くの部隊と連絡がつかず、混乱は続いている。

これを機に暗躍する国家も出てくるはずだ。そこは政府機関が対応することだが、シグマが撒いた種火は確実に拡がりつつある。

「それにしてもあんな取引よく成立したな？」

「利害は一緒だったからな。ボンネットに押し込んだ隊員が役に立ったよ」

撃たれながらもエンカーはシステムの制圧にかかっていた。すぐに組織閉鎖しなかったのもその為だ。

しかし、体力の消耗もあり間に合わない。しかもエックスが負傷してしまった。

誰も助からないのかと思った矢先に、外部から防壁を突破してきたシグナスと接触したのである。

エンカーは司令システムのデータ、そして拘束している第9部隊隊員をひき渡すのと引き換えに、基地システムの制圧を託した。お陰でシグナスは残り65秒の作業を1秒に短縮できたのである。

そしてエンカーはエックスの深層にアクセスし、エックスを無理やりだが再起動させたのである。あのままでは確実に破壊されると判断したからだ。

そして基地の制圧は完了したが、シグマは捕まえることが出来なかった…

「何やってんですか？シグマ隊長」

ひとしきり哄笑したシグマはその声に振り向いた。中空を浮かぶ緑

色のロボット、アストロが無感情な目で彼を見下ろしていた。

「なるほど、シグナスの差し金か…」

基地制圧のからくりを察したシグマは不敵に笑った。もはやネタが割れてしまったが何のことはない。自分から名乗り出る前になっただけのことだ。

「あ、その前にサイボーグ用の救命キットです」

背後の亜空間からキットを取り出したアストロはエンカーを介抱する下忍に投げて寄越した。

なるほど、ワープでここまでできたのか。

「さーて、レプリフォースの方々がいらっしやるまでこの愉快的な状況について説明願えますか？じっくりと」

本部では見せたことのない無表情な目と底冷えする声でアストロはシグマと対峙した。

亜空間から吐き出される20近いレーザービットが移動し、全てがシグマを照準した。

「成る程、それが貴様の本性か？」

「やだなあ、人聞きの悪い。シグナス副官から聞いてるでしょ？元プラネタリウムのガイドですよ」

「ふむ…ミサイルのスイッチを押したのが私だとしたらどうする？」

「へえ、じゃあオイラが蜂の巣にしても問題ないですねえ」

泰然するシグマとアストロの間に一触即発の空気が流れる。

「アストロ、俺がぶちのめしてからにしろ」

ミニグレネードを構えるジエミニが前に出ようとした。彼もシグマを生かして返す気は無かった。

「残念だが、どちらも受け入れるわけにはいかんな…」

シグマの体が発光する。転送の兆候だった。しまったとアストロとジエミニが引き金をひこうとしたが遅かった。

「エックスと、お前の主に伝える。近い内、また会おうとな」

動けないエックスとエンカーを見遣りながら、そう言ってシグマはその場から消えていった。

その後、エンカー達とエックス達はアストロによってそれぞれ市民病院前とハンターのメディカルルームに転送された。

下手すれば重要参考人と連行、しかも既に脱走犯と不法侵入者、拳げ句非合法アクセスもやっている。また独房に連れ戻されかねないいつの間にか本部に戻っているゼロは今ごろ混乱していることだろう。エンカーは医者に「何故すぐに組織閉鎖しなかったのか」と叱難されたが、体内の弾を摘出し、傷口の縫合、輸血の後絶対安静を条件に解放された。

ただし動力炉付近を貫かれたマグは強制的にレプリロイドの集中治療室に担ぎ込まれた。逆に腕だけのジエミニは順番待ち。彼以上の重傷レプリロイドは多数いるのだ。

再び、街を見る。無惨に破壊された見慣れた街。

今ごろ、同じ光景をシグマも見ていることだろう。

「で、これからどうする？」

ジエミニの言葉にエンカーは立ち上がった。答えは決まっている。

「まずは情報収集だな。単体ワープだけ見ても、シグマにバックがいることは確かだ。ハンター内にも間違いなく協力者がいる」

夕陽が沈んでいく。世界が闇に包まれようとしていた。

「連絡の取れる全DWNに通達しろ」

二人の後ろに、シャドーを始めとした組織の面々が立ち並んでいた。全員が真の主の号令に聞き入った。

「世紀にあるかないかの大パーティーだ。仲間外れは作っちゃなんねえ」

誰を怒らせたか徹底的に叩き込んでやれ

エンカーは、否　　アルフォンス・L・ワイリーは明確な殺意と怒りを湛えた凶悪な笑みで待っているだろう敵を睨み付けた。

その向こう、廃墟となった高層ビルの上で、指導者としての赤いマントを羽織ったシグマは燃える街に向かって高らかに謳った。

「立ち上がってくるがいい！エックス、そして『ロボット』ども！私はここだ！ここにぞ！そして始めようではないか！レプリコ

イドの、我々の可能性を賭けた真の戦いを！！」

個性とは不均一な世界における戦利品であり、多様性とは破局を回避する手段である。

人と機械を越える世界を夢見て、シグマは闇の中で狂笑し続けた。

Day of (後書き)

さて、続きは書くべきか否か…感想待ってます。

設定（プロローグ～Day of まで）

駆け足連載だったためか、色々説明不足な部分があったので補足と
して書きました。

中休みと思つて気軽に読んでください。

・エンカー・ザ・ゴールドクロウ（金食い鴉）

三年前シテイ・アーベルに現れた全身義体の青年。賞金稼ぎにして
メイガス級のハッカー。

年齢不詳。推定二十代後半から三十代前半。

本名、アルフォンス・L・ワイリー。

故アルバート・W・ワイリーの孫にして不肖の後継者。一応現ナン
バーズの主だが本人は幼少から兄弟同然に育っているので、その自
覚は薄い。野心もない。

しかもロボット改造と修理は得意だが、創作の才能は絶望的なので、
多分ジジイもその辺は一切期待していない。

人を食った性格をしているが、人情に篤く人間にもレプリロイドに
も平等に接する。ただし一家の敵には容赦しない。

現在死んだRKN・001『エンカー』の名を借りてナンバーズの
生活費を稼いでいる。

・シャドー 影の君【BGM・月下を駆ける】

正式名称、DWN・024『シャドーマン』

見たまんま隠密に特化したニンジャ型ロボット。一人称は『拙者』
『ござる』だが、キレたりすると地が出て『俺』に。ギガミックスで
キャラ作りしていたのが判明。

影に潜る能力を利用してワイリー博士の護衛や情報収集の任に就いていた。今も引き続き孫の護衛についている。

一世紀近い空白期間をカプセルに入らず大戦中の世界が津々浦々して、独立し自分の組織を設立。世界の影で暗躍する。

エンカーにとつては親代わりの存在で、よく無茶をする彼を心配しながら誠讜をこめて『御曹司』と呼ぶ。

色々あつてキセルの似合う擦れたオッサン然となったが、冷徹ながらも熱い任侠である。

・マグナ 磁界の主【BGM・万物の万有引力】

正式名称、DWN・018『マグネットマン』。愛称はマグ
磁力を操る赤いロボット。トレードマークはマスクつきヘッドパ
ーツに付いているデカイU字磁石。故に大雑把な性格になったのは公
式。ただし周りの整理整頓に細かいので、事務所の家事を一手に引
き受けている。

見た目は赤と黒のジャケットアーマーに赤のアームパーツとフット
パーツが特徴的な兄ちゃん。

何故か健康グッズマニアなので、ワイリー博士の健康管理を担い主
夫2号のあだ名を持つ。(1号は長男)

カプセルから目覚めた現在ではもの探しの才を活かしてジエミニと共
にシティ・アーベル東区に事務所を構え、探偵業を営んでいる。も
の探し、家事、格闘戦担当。

・ジエミニ 鏡像の射手【BGM・屈折空間】

正式名称、DWN・019『ジエミニマン』

ホログラムと屈折反射する『ジエミニレーザー』を使うロボット。

逆立てた前髪のような尖った水晶体四本と白いジャケットアーマー
が特徴。

自称ニヒルな探偵。その実は女好きのナルシストだったりする。高慢で屈折していてマグとは対称的な性格だが、紅白凸凹コンビで通ってる。

主に接待（美女歓迎）、情報収集と整理、推理担当。

ただ悲しいかな、私立探偵事務所M & a m p ; Gは探偵というより便利屋として名高い。

・アストロ 未確認飛行物体【BGM・惑星コンクール】

正式名称DWN・058『アストロマン』

元プラネタリウムのガイドロボットで、異次元ホールを作って宇宙空間を見せていた。

その能力を使って亜空間を渡ってあらゆるところへ移動したり、ビットを入れておいたりする。

覚醒後、ゼロの安否を確認するため単身イレギュラーハンター本部に潜入。能力を使って潜伏していたが、やっぱりバレて捕獲作戦が展開された。拳げ句、うっかりシグナスの執務室に逃げ込みシグナスに捕獲される。その後、気に入られたのかシグナスのサポートメカとして本部にいることを許される。今ではオペレーター達のマスコット。

シャイな性格で、追いかけられると異次元に隠れてしまう。

・月光 ストライダー

シャドーの『息子』。影に潜る能力がない以外はほぼ同レベルのスペックを持つ。

シャドーが後継者として作ったレプリロイド。彼にかわって組織の指揮を代行することもある。

ただし年齢設定が17なので、親子だけの時は思春期の息子と擦れたオヤジ。最近バイクに憧れてる。

・ゼロ 最終存在

故『悪の天才科学者』アルバート・W・ワイリーの最終傑作にして最高傑作なる忘れ形見。40近く存在する悩ましき兄弟の末っ子（哀れすぎる）

しかし不幸か幸か、覚醒直後の事故のため記憶を失い、その自覚はない。

『女みたい』とか『オカマ野郎』は禁句。

現在保護観察の下、特A級イレギュラーハンターとして第17部隊で活動中。

・エックス（ロックマンX） 無限の可能性

原作の主人公。

故トーマス・ライトの最終傑作。『ロックマン』の後継機。ただし本人にその自覚は無い。

実はレプリロイドのオリジナルモデルだが、その事実を知る者は少ない。

保護観察の下、B級イレギュラーハンターとしてゼロと同じ第17部隊で活動中。

能力は高いが、心優しく、敵を撃つことに躊躇い悩むことから好意的に見る者も多いが現場での評価は低い。ゼロの相棒でよき親友。

・シグナス

『冷徹』が代名詞の総監補佐にして副官。実は世界最高のCPUを搭載している。その為高密度の冷却機関を搭載し、有事にはこれを解放する。

ゼロとエックスの潜在能力に一目置き、たまにE缶を奢ってはとん

でもない任務にさせてくる。二人にとっては仕事に乗せるのが上手いファツキン上官。

・総監

公式で肩書きだけ出ていつの間にか辞職した人。二次創作では操りやすいよう設定された小物だったり、オカマ言葉を使っていたりする。

ここでは普通の指揮官で、半分モブ扱い。外見はジェネラルの銀色バージョン。

・VAVA

苛烈で過激な火力信奉者な第17部隊のA級ハンター。改造ライドアーマー乗りでもある。

エンカーや探偵たちと腐れ縁で、たまに事務所に来てはゲームしたり、茶をたかつたりした。

最近暴走ぎみで負傷者が絶えないため、上層部から電子頭脳に異常があると見なされて処分が決定された。

だが、シグマの反乱の際脱走。行方をくらます

・シグマ

Dr.ケインの最高傑作で、初期のレプリロイドでもある。現在において最も最高にして最強。

精鋭部隊の第17部隊隊長。エックス、ゼロ、VAVAの上司である。

ナンバーズにとってはゼロがはぐれる原因になった人物。

最高の指揮官として内外から篤く信頼されていたが、エックスに『無限の可能性』を見いだし、進化という概念を盲信して反乱を起こした。

・ストーム・イーグリッド

第7部隊（通称、飛空挺部隊）隊長。モチーフは鷹。『鷄ガラ』と言ったら怒る。

ゼロの旧い戦友である。こないだまで自分が警備していたミサイル基地が身内に占拠されるなど夢にも思わなかっただろう。

・ステイング・カメリーオ

第9部隊（レンジャー部隊）副隊長。モチーフはカメレオン。

色々暗躍中。第9の隊長は無事なのだろうか？多分密室殺人的にいつの間にか暗殺されてる。

設定（プロローグ）Day of まで（後書き）

ちよつと不安ながらもここまで。
次回は本編です。

プロローグ（本編）

集結（前書き）

とりあえず、所在の判明している面々の状況。
戦闘はありません。

プロローグ（本編） 集結

シティ・アーベル全域に非常警戒体制が張られ、パトカーが絶え間なく巡回し、武装した警官やハンターが市内を見回っている。

そんな中でマグとジェミニが事務所に帰れたのは深夜だった。

東地区の被害は比較的少なかったが、道路や建物には暴走メカニroidが通ったせいであちこち陥没したりヒビが入っている。付近の住民は避難所に行ったのか、明かりはなく、閑散としていた。

事務所は…外から見た限り無事だったが、二階の応接室に（一階はガレージ。バイクは張り込み先でハンターに没収された）明かりがついていた。しかも入り口に角材やガラスが散乱しており、血の跡まであった。

こういつたときの略奪は珍しくない。シティを出れば廃墟同然の街はザラだし、大戦が終わっていることすら知らない紛争地も多い。シティの二割程度とは言え、市民にもそんな戦場から招待された者は多く、未だ略奪者気分が抜けていない者もいる。

しかも今回の騒ぎの原因が原因だ。市内のレプリロイドが人間によるレプリロイド狩りを恐れていた矢先である。

二人は多目的ハンドガンを携え、足音を消しながら中に入っていた。

「俺は階段でいく。お前はエレベーターで行け」

「おう」

マグは処置がすんだものの、あまり激しい負担をかければ動けなくなる。むしろ半ば病院から脱走して帰ってきたのだが

ジェミニは片腕だけの自分が動き回ることにして、敵の退路を塞ぐことにした。

階段には血の手形や足跡がいくつもあったが、どれも下へ向かって

いることから手形の主はどうも血塗れになってから外に出たらしい。一度仕事の関係で傭兵どもの襲撃をくらって以来、応接室の入り口にはクレイモア地雷を仕掛けてあり、留守中無断で入ろうとすると発動する仕組みになっている。今いるのは後から入ったのか？

階段を上がるうかというところに上の廊下から誰かが歩いてくる気配があった。壁に身を隠し、銃のセーフティーを外す。

そして、エレベーターが着いた。相手が銃のセーフティーを外す音がわかった。エレベーターのドアが開こうとする。

「動くな」

警告ともに相手のこめかみに銃を突きつける。エレベーターの中でマグも銃を構えた。

エレベーターの中の照明で相手のひきつった顔が浮かびあがった。白いマスクに頭部に丸い水晶…

「クリスタル…？」

マグが間抜けな声をあげる。そこにいたのは間違いなくDWN・040『クリスタルマン』であった。

「だあって玄関荒らされてるし、中入ったら血だらけだろ？しかも明かり点いてるし」

応接間でマグは半ば不貞腐れながら弁解した。

「怖かった…」

革のソファーに座ったクリスタルが呟く。

「で？何でお前らここにいるんだよ」

半日ぶりにE缶を補給したジェミニが並んで座る五人の弟に言った。
DWN・036『ジャイロマン』がムツとして聞き返す。

「心配して様子見に来た弟にその言い方はねえだろ？」

「勝手に入って人ん家のE缶飲んどるのが『心配で様子見に来た』か？大体対人地雷設置してあつたらろ？」

ジェミニはガラステーブルの上の空缶を指差しながら言った。

「しょうがねえだろ？こつちは昼の騒ぎで客逃がすために駆けずり回ってたんだぜ？」

「いや、どうも俺たちが来る前に入ろうとしたやつらがいたらしくてさ。来たときに地雷も発射済みで部屋の前血の海だったんだよ。さつき廊下の掃除終わらせたとこ」

「ちなみに死体は無かったよ。仲間が持っていったかしたんじやない？表に新しいタイヤ跡もあつたし」

「お前ら本当に探偵やれてる？」

グラビティーマンに赤い列車型ロボット、チャージマン。そしてストーンマンが口々に言う。どれもマグとジェミニ達サイドナンバーズの後に製作されたフィフスナンバーズである。

「しかしナパームとウェーブはとにかく、スターはどうした？時給戦隊たんねーぞ。五人プラス番外のもう一人いねーんじゃ人気取れねーだろ？」

「人気とか言うな！」

マグの疑問にクリスタルが反論するが、実際ここにいるフィフスは面子が足りない。

ナパームマンは傭兵になって中東へ、ウエーブマンは水中戦用であることを利用して大西洋を中心とした海底探査専門のフリーダイバーをやっている。

残る六人が以前同様、『時給戦隊アルバイター』として市外で活躍もとい土建アルバイトなどに精を出していたのだが…

「スターは先に基地に行つたよ。色々用意したいって」

「今回の件、犯人捕まつてないじゃん。近いうち物騒になるだろうから俺たちのパーツとかも余分にいると思つて」

「まあ、バイトは当分無理っばいけどな…」

「あ…」

バイトという言葉が出た時点でジエミニは五人に連絡がいつてないことを察した。そういえば、ほとんど住み込みで働いてたな…こいつら

「ならちようどいいや。そのうちシグマとかち合うから、攻撃メカも持つてこいつて言つとけ…てか今から通信した方が早いな」

一瞬で部屋の空気が凍る。それに構わずマグはナンバーズのコードで基地に帰還しているスターマンに連絡を取つた。

はい、こちら037

「あー、こちら018。スター、今基地か？これから武器と頭数いるから揃えといて」

……ホワッツ？

ピザでも注文するかなのような気安さで武器弾薬の注文するマグの横でクリスタルを始めとする五人がジェミニに詰め寄った。

「どういうこと？」

「おい！今度は何やらかした？」

「シグマって、ハンターの人々？僕あの人きらい」

「それ以外誰がいる？ちなみに今回のメカニロイド暴走とミサイル騒ぎの犯人だ」

「なにいいいいい！？」

絶叫のような声が事務所に響く。耳を押さえるジェミニにクリスタルがつかみかかる。

「何でアンタんなこと知ってたんだ？あれか？またあれか？猫探したら首輪に密造武器のデータ入ってマフィアの兵隊に追い回されるパターンか！？俺車壊されるわ、ハンターに絞られるわ、営業車だったから仕事先でもまた絞られるわ…ってか何でオメーらじゃなくて俺が末っ子の同僚に絞られなきゃなんねえの？ねえ！」

「ま…そうとも言えるか？突っ込んだ先がたまたま例のミサイル基地だったとか…」

「やっぱりかあああああ！！！」

そこへ通信中のマグがさらりとトドメ。

「あとカメラもグルっぱいから多分他のA級ハンターも敵になるぞ。あ、スター。バイクのパーツも頼むわ。カメラも持ってかれた」

「ちょ。ミーはパシリじゃないね！」

「ウワアアアアア！！！」

結局五人は二人から記録媒体で事の次第を一秒で把握するまで悲鳴を上げていた。

ミサイル基地からミサイルが発射されたという情報は、国外の衛星が捉えた写真とともに瞬く間に世界中に広がった。

どこに飛んだかということで様々な議論を呼んだが、一番多かったのはレプリロイドの国際普及に反対する反動テロの犯行と言うものだった。

だが、未だ犯人からの犯行声明はなく。議論は行き詰まってしまった。

シテイ・アーベルが国外にもレプリロイドを配置する試みを始めた矢先であった。

そんなニユースを兄弟達とともに観ながら、コウモリの翼を持つ怪人口ポット『シェードマン』は通信越しに溜め息をついた。

「事の委細は承知しました。ぶっちゃけレプリロイドの反乱軍と喧嘩するんですね？」

まあね。こつちも面割れてるし、向こうも了承済み。で、今は敵の戦力が確定していないから情報収集中

「つまり手伝えと？」

そ

坊っちゃん、早まんなきゃいいけどな〜と思っていた矢先である。

シェードは長い鉤鼻の上の眉間を押さえた。

別に強制はしないさ。お前にはフォルテのお守り頼んでるし。折角WRUが無くなって、追及も無くのんびり自分の暮らしを満喫…

「坊っちゃんも人が悪い」

主の言おうとしたことを、シェードは即座に遮った。そんなことを聞きたいのではないのだ。

「そりゃ頭数全員揃えるのは無理ですけどね、そんな話聞いて黙ってるわけにはいかんでしょ？何よりシグマの動機にヘドがでる」

本当に人類への反乱なら手伝わなくもないが、奴は人間もレプリロイドも見えていない。多分、『人類種への反乱』という分かりやすい大義名分をぶちあげて兵隊を集めるだろう。

人間に近いが故に引き寄せられる者も多かるうが、誰も幸せにならない。

そんなことで自分達はとにかく、絶対自分の使命を貫こうとするだろう末っ子が振り回されるかと思うと頭に来た。

「わたくしとしてはこれを機に坊っちゃんの本名を名乗ってくれろと大歓迎ですが、よござんしょ。こちらでも出来る限りのサポートはしますよ」

…ありがとう

「今更」

全く祖父に似なかった新しい主に通信ごしで笑いあったとき、モニターの画面が揺れた。そして映し出されたのはまだ煙の上がるシテイ・アーベル。

電波ジャックだ。シェードをはじめとしたDWNは慌てずにそのモニターに見いった。

「…というわけだ。理解したか？」

場所は戻って再びシティの探偵事務所。先程とは打って変わって水のような静けさが部屋を覆っていた。

「アホだ。たった一人の本気見たさにやることか？」

「僕全然わかんない」

「それで俺のCDとか、鉢植えとか…全部パー…」

「俺なんかバイト先がパーだよ。ジュニアがキレルわけだ」

クリスタルとジャイロはシグマの動機に愕然とし、ストーンマンに至っては声も出ない。わかってないのはグラビティーだけである。

「ちなみにアルは今シャドーの店で安静中だ。と言っても、既に軍隊時代の顔に戻ってたから今頃ダイヴしてネット中を探し回ってるぞ。強制はしないとは言ってるが、その分足りなければ足りないでもやる勢いだ」

淡々と絶望する弟たちに事実を説明するジェミニの後ろで、スターに指示していたマグが声をあげた。

「え？何、ニュース？」

「どうした？」

「とりあえず、テレビつける。電波ジャックらしい」

言われるままに電源を押し、画面がつくことを確認する。そして、荒れ果てたシティ・アーベルの映像が写った。そして場面が変わる。

『各地に散らばるレプリロイドの諸君！我々の進化の時が来た！』

赤いマントを羽織ったシグマが、凶悪な顔で画面に向かいそう宣言した。

その犯行声明及び宣言は世界中でメディアが復旧しているすべての国に放送された。

複合企業国家として復興した日本。最初の核攻撃から奇跡的に残った温泉旅館で、仕事の休憩中だった深紅の髪的青年ロボットメタルマンはテレビの内容に絶句した。

戦争の混乱で三つに別れてしまったアメリカ。そこに今も存在する第二ワイリー基地。

「キャハハハハ！ねーねー！エアー、クラッシュ。なんか面白いのやってるよ〜」

テレビを見ていた巨大ジツポライターに手足を生やしたようなロボット『ヒートマン』は無邪気な子供のように笑いながらテレビを見ていた。

「ああ、見ている…」

「嵐が来るなあコリヤ」

部屋の奥で胸に巨大なファンを着けた首の無い藍色のロボットDWN・010『エアーマン』とオレンジ色の装甲を持つDWN・013『クラッシュユマン』は既に自分の得物をチェックにかかっていた。

南米、未だ新興政府とゲリラの間で衝突が激しい国に拠点を置く傭兵のセイフハウス。軍事ニユースを漁っていたサーチマン、グレネードマン、スラッシュユマンは獲物を狙う目でテレビの映像を見ていた。

どこかの廃墟の街。そこでなんとか生きていた発電所を頼りに細々と生活していた人々は壊れかけた大モニターの前で集まっていた。レプリロイドという言葉を知らないにしても、何か悪いことが起きそうだと言うことを彼らは直感で悟った。

ただ、その後ろで、頭からマントを羽織った、金色のV字型パーツをついた赤いヘルメットの青年が薄ら笑いを浮かべて去っていったことに誰も気づかなかった。

吹雪の舞う極地。そこに危なげなく建つ小さな一軒屋。明かりの無い部屋で型遅れのラジオが世界の事件を伝えた。

部屋の主フリーズは読書した姿勢で微動だにせねままその報せに聞き入っていた。

「ローマの歴史家クルチウス・ルーフス曰く、『歴史は繰り返す』。正にそのとおりですね……」

暗い通路を歩きながら、シールドは遠い目で呟く。親は子に、ロボットは人間に似る。それを証明したようなものだ。

通路の奥、いくつものケーブルに繋がれたカプセルがある。中には胸に大きな傷を負った黒い少年が昏昏と眠り続けてその傍らに、黒い狼型ロボットが寝ていた。ロボットはシールドに気づき起き上がる。シールドがひざまづいてその鼻面を撫でると嬉しそうに鼻を鳴らした。

「しばらく家を空けます。その間、留守を頼みますね」

そして、彼はカプセルの中に眠る黒い少年に言った。

「では、いってきます。フォルテ、ゴスペル」

さて、まずあの引きこもりをどうやって引っ張り出そうか…
そう考えながらシェードは部屋を後にした。

「予想通りだな」

「まったたく」

シグマの犯行声明と宣戦布告を聞き終えたエンカーとシャドーは窓の外の街を見た。

いつもより暗いシティ・アーベル中央区。人々は再び夜の暗さに怯えていることだろう。

今のシグマの言葉にどれだけのレプリロイドが動揺し、混乱あるいは共感しているだろう。だが、その中に真実を知る者は殆どいまい。

「進化とは適応と多様化つてな。闘争にそれを求めるのは短慮つてもんだ。結局は好きなように生きた結果さね」

エンカーは、ここにはいないシグマに皮肉を言った。特殊化の果ては緩やかな死しかない。結局あの男はエックスと本気で喧嘩したいだけだ。

「お前の目指す先には誰も幸せになれない。だからお前は反逆の英雄として死んでくれ」

そして、夜明け。イレギュラーハンターの半分近くが消息不明、あるいは造反したという報せが入った。

プロローグ（本編） 集結（後書き）

さて…ここから今まで通りケータイのままいくか、パソコンで書いて一気に出すか…

包囲網に抱かれて

翌日のシテイ・アーベル。

未だ非常警戒体制が張られていたが、各区域にある病院や被災者への救援物質が必要となったため、生き残った交通を市政府は解放した。

運送トラックが進むにあわせて、シエルターから出て自宅や知り合いの様子を見に行こうと民間の車もいくつか走るようになった。

実際イレギュラーハンターの第9部隊がSWATと交戦して死傷者が多数出たり、レプリフォースの施設が一時占拠されたためミサイル発射されたり、犯人のシグマが宣戦布告してイレギュラーハンター本部は勿論、政府機関は調査及び責任問題や原因究明で荒れに荒れていたが、情報規制もあり、市民は不安ながらも自分の手に届く範囲で備えようと安定に入っていた。

だが、夕方。少しだけ平穏を取り戻した街で再び火の手が上がった。崩れ落ちる柱と共にハイウェイが割れていく。高架下に設置されていた爆弾のためである。

事が起こった瞬間に真上を走っていた車はその断裂に飛び込み、間一髪ブレーキが間に合った車は我先にと反転して逆走した。だが恐怖はこれでは終わらなかつた。逃げ出した先に軍用メカニロイドが道を封鎖して待ち構えていたのだ。

ガンボルトやラッシュローダーを始め、突撃用の武器を搭載したそれらが逃げる車に襲い掛かる。人々は絶望に悲鳴をあげながらそれを見ているしかなかった。

そこへ一つの影が間に躍り出た。誰もがその人物がローライダーのドリルに貫かれるものと想像したが、そうはならなかつた。突然現れた金色の障壁が、逆にラッシュローダーを吹き飛ばしたのだ。

「フツ・・・ホホホホ！ミのスターバリアーは無敵！！ユーたちの無粋な攻撃など屁でもないね」

茶色を基調に、星型のパーツがついたアーマーのロボット　D
WN・037『スターマン』は手で白いバラを掲げて仰々しく笑った。しかも飛行メカによるスポットライト付きである。

一瞬微妙な空気が流れたが、その上空で民間のヘリが赤銅色のSL型列車ロボットを投下。スターマンの目と鼻の先でクレーターを作りながら着地した。

「はい、列車が通りまーす！」

頭の上の煙突から勢いよく黒煙を吹き上げて、DWN・038『チャージマン』は文字通り蒸気機関車のごとくメカニロイドの軍勢に突貫し、破壊していった。

「外すなよ？」

「てめえこそ、ブルって操縦幹離すんじゃないぞ？」

ヘリの中では対装甲歩兵用ライフルを眼下に向けて構えたクリスタルと、操縦者のジャイロと軽口を叩きあった。

クリスタルにサーチマンほどのFCSは無いが、まったく無いわけではない。少なくとも、自分の能力が使えなくなった時のためにその技能はインプットされているのだ。

パンツと小気味のいい音とともにメカニロイドが次々と撃ち抜かれていく。

だがそれでも何体かがチャージマンと狙撃をかくぐって車の方へ突っ込んでいく。ガンボルトのミサイルはバリアで何とかなるが、大質量を押し込まれては長く持たない。

「ほいつさ」

「おらよつと！」

グラビティーマンが反重力で浮かべた瓦礫をストーンマンが投げつけ隊列を組んだラッシュリーダーを一掃した。これで粗方の軍用メカニロイドは片付いたかに見えたが…

「おつと！」

勢いよく飛んできたツルハシをスターマンは白刃取りで受け止めた。射線を予測して見た先には工業用メカニロイドたちの姿があった。工業用ヘルメットを被ったディグレイバーから、整地用のクラッシュヤーまでいる。

「こいつらまで…！」

「使えるのは片っ端からつとこだな。こーいう手え使うのはどこも一緒か」

暴走ウイルスを仕込まれていたのは大型重機系だけではなかったようだ。たかが工業用だが、それでも武器の無い人間には脅威になり得る。

自分たちもかつては散々使った手だ。躊躇いは一切なかった。

「こーいうのつてキングンとこカチコミに行った時以来だな」

「ん？あんま覚えてねエ。とにかく片っぱしから壊しまくってた」

「俺も」

「まあ、やることは一つ…」

そう、たとえ人数が足りなくとも100年前から決まっていることがある。

「世（職場）のため」

「人（お客様）のため」

「我々は戦う！！人呼んで…」

『時給戦隊アルバイター！この街は俺たちが守る！！！！』

六人がポーズを取るバックで演出用の爆発が起こる。あの…後ろに逃げ場なくした人たちがいるんですけど…

「殲滅して突破口を開くぞ！モードBだ」

「ラジャー！」

「お、始まった始まった」

戦闘の始まったハイウェイからそう遠くない市街。道路の坂の上で双眼鏡を覗き込んでいたマグは道路の上で飛び交う岩や星の光を見ながら言った。そして坂の下を見下ろす。

いつもは人で賑わう界限だが、非常警戒体制のため市民の足はぱったり途絶え、代わりに破壊活動を行う暴走メカニロイドたちが闊歩していた。

「三分後にはクラッシュたちが到着する。それまで数を減らすぞ」

「全部さらつてもいんじゃないかね？」

「街が更地にならなきゃいいけどな」

チタン&フォーミュラから盛大な排気音が噴き出す。運転がジエミニ、後部席で攻撃手がマグである。

「落とされんなよ？」

「誰に言ってるんだ？」

ジェミニの右腕も換装を終え、マグの内部修理も殆ど済ませている。レーザーとマシンガンを構え、準備万端の二人は愛機を急発進させて敵の中へと躍りこんだ。

その間に街のあちこちで立ち上る黒煙が数を増やしていく。通報を受けて駆け付けていくイレギュラーハンターやSWATのサイレンを聞きながら、エンカーは時給戦隊たちとは反対側のSA付近で街の様子を見ていた。

街に配置させた偵察用メカたちからの映像がバイザーの裏側に次々と映し出されていく。そして通信、コード024からだ。

御曹司、中央高速道にて工事用メカニロイドを使った暴動テロが発生。東地区方面はフィフスナンバーズが対処に当たっています。

「ああ、見えるよ。組織の皆は？」

中央区付近における暴動の鎮圧にあてております。マグとジェミニも、ゼロの援護に向かいました

組織は表立って行動には出ない。そのかわり路地などに配置した狙撃用のジョーなどがシャドーとともに暴走メカを駆逐していつてる。対処に当たっているハンターが後で首を捻るだろうが、報告書に困っても知ったことではない。

造反したとされるハンターに接触できれば御の字なのだが…音信の取れていないという第7部隊の消息も気になる。敵に制空権を取られるのは痛い。

…それと、そちら側の高速道路へエックスが急行しております
「ありがとう。あいつの手伝いを終わらせたら、そっちにも行く。
じゃ、通信終わり」

「武運を」

日が沈んでいく。

子供の頃、義体化手術を受けてから周囲とのずれに愕然とし、世界に爪弾かれてしまった錯覚に絶望していた。夕陽はいつもと変わらないのに、自分だけが変わってしまった事実にはただ立ち尽くしていた。

『ねえ君、そんなところにいたら危ないよ？』

手すりに腰かけて夕陽を見ていたあの時、たまたま通りかかった少年型ロボットが声をかけてくれなかったら眼下の街に身を投げ出していたかもしれない。

こんな体になつてまで生き延びた意義が見いだせただけではないが、少なくとも自分は世界から外されてはいないのだ。それがわかっただけのことだが、あの瞬間彼は間違いなく救われたのだ。

夕陽を見るたび、エンカーはあの頃の情景を思い出す。そして、今でも振り返ればあの少年に　　ロックに会えるのではないかと期待を込めた錯覚をしてしまう。

郷愁を払うようにV・MAXを最大速度で発進させ、逆走してくる車たちの間を一気に抜けていく。

今回は目いっぱい暴れたい気分だ。

罅割れた道路の上にいる暴走デグレイバーを視認。リフレクトスピアを一気に振りぬき頭部を破壊する。その後には迫りくるラッシュユローダーは轢き潰し、ガンボルトにはバイクについているロケットランチャーで迎撃した。軍用がいるなら指揮官の役割をしているのもいるはずだ。見つけ次第、送信機器以外を破壊して逆探知ウィルスを仕込む。この体ならそれは可能だ。

何度もメカニロイド達を破壊する作業をこなしている内に、寸断されていた降下車線から青い影が走ってくるのが見えた。

急停止、タイヤが悲鳴を上げながらアスファルトに黒い線を創つて

止まる。向こうもこちらに気づいた。

「貴方は…!!」

「やあ、また会ったな。ハンター君」

そして、夕陽の中　　人間やめた青年はもう一度人間らしい機械に出会った。

包囲網に抱かれて（後書き）

（テ）く悪いがシグマ、俺がジョーカーだ！

紫の人の出番です

狂騒は憎悪の調べ（前書き）

パソコンでやったら長くなってしまった…。

狂騒は憎悪の調べ

爆破テロのために下敷きになって機能停止してしまったレプリロイドがいた。

その瓦礫の麓で子供が泣いていた。

自分を助けてくれた彼のために、子供は泣いていた。

俺は泣きじゃくるその子を背負って、彼の両親の下へ送った。

この子を生かした優しさがとても尊く、この子の流した涙がとても悲しいと思えたから

俺はまっすぐ、燃える街を睨みつけた。

爆音と黒煙が満ちるシティ・アーベル。エックスは一人走っていた。腹部の治療と意識回復からさほど時間がかかっているが、本部内にかかったエマーゼンシーに彼は即座に反応してメディカルルームから飛び出した。

そしてハイウェイでの爆破テロである。覚醒直後、同じメディカルルームにいたシグナムからシグマが宣戦布告し、それに合わせて何部隊かが音信を途絶。第17の隊員、しかも特A級の隊員も何名か消息を絶っている。その情報を聞いてもエックスは驚かなかつた。（自分が意識の無い間ゼロが事情聴取でかなり絞られたようだが）

あの時、自分がシグマを撃つことが出来ていたら…。皆は「むしろ、見せつける意図があったにしてもあのシグマ相手によく破壊されなかつた」とゼロと自分に言ったが、二人の中にあつた後悔は晴れなかつた。

現場に到着し、エックスが見たのは墜落したトラックと瓦礫の前で呆然と座り込んでいる近所の少年だった。

声をかけても正気を取り戻さない少年の視線の先を見る。そこにあつたのは、瓦礫の隙間から流れ出るオイルと何かを求めるように突き出された機械の片腕だった。近寄り反応を確かめるが、無し。あつたとしてもコーラ缶のように潰れているのは目に見えていた。ふと、瓦礫の中に見合わぬ白いプラスチックのプレートが目に見えた。それを拾い確認したところ、ギリシャ文字の「」をアレンジした紫色のエンブレムが焼きつけられていた。誰のものは、すぐに分かった。

ひとまず現場を他の隊員に任せ、エックスは少年を保護しシエルタ―に送った。

もはや隊長が　シグマが大型メカニロイドの暴走事件に最初から加担していたか、途中から手段を横取りしたのかわからないが、今となつてはそんなことはどうでもいい。

犠牲の無い進化など確かに無いかもしれない。それでも種として生きるには必要悪かもしれない。それでも種として生きるには必要悪かもしれない。だが、エックスは流された血に触れて、流された涙を前にして、確信する。

こんなことは間違っている。

ハイウェイ上に暴走したメカニロイド群の通報が入り、車たちが反対車線にも関わらず我先へと高速を降りていくのが見える。その後ろには分断された道路から迫りくるラッシュローダーなどのメカニロイド群。車が全て避難したことを確認すると、エックスはバスターを展開し、それらをフルチャージで撃破した。

そして、エックスは戦場となったハイウェイへ走り出したのである。そこで凄惨な光景と信じられないものを同時に見たのは言うまでもない。

罅割れたアスファルトと破壊され、燃える車両。そして黒いV-MAXに乗った男が暴走メカニロイドを蹂躪している瞬間であった。啞然とすること一瞬、バイクは急制動をかけ目の前で停車する。黒いライダースーツとバイザーに赤い髪。見間違えるわけが無かつ

た。だが彼はシグマに撃たれて重傷だったはずだ。

「あなたは…!?!」

「やあ、また会ったな。ハンター君」

夕陽の中、何も気負う風でもなく男はエックスに笑いかけた。

あの後、ハンター本部で覚醒した直後のエックスはすぐに二人のレプリロイドと人間の安否消息を確認した。だが皆それに関しては首を捻るばかりで、自分たちを回収したというアストロも「ハンター本部に送ったのはゼロさんとエックスだけ」と答えてシグナスの付き添いにいった。監視映像の記録にも乗っていなかったという。そしてあの時、目の前で血だまりに沈んでいた男が目の前で戦っているのである。

無事だったのか。やっぱりあの時いた人だったのか。と、色々聞きたいことはあったが、自分はイレギュラーハンターである。

「ここは危険です。至急避難してください!」

「今この街で危険じゃない所こそ無いと思うぜ?」

悪びれもなく返す男の言葉の後、自分が通ってきた道が爆発した。

「……」

「…な?」

更に前方からは増軍のメカニロイド群がひしめき押し寄せてくるどころだった。呆ける暇もなくエックスは男と目を合わす。男は親指で自分のV・MAXの後部座席を指さす。

「乗ってくか?」

「…イレギュラーハンターです。当車を借用します!」

「任せろ」

ホログラムのバツジを見せるエックスの真面目さに苦笑しながら、男は気前よく前を詰めてエックスを乗せた。敵の方向へ方向転換し、甲高く排気音を上げる。

「俺は、エンカー。エンカー・ザ・ゴールドクロウ。賞金稼ぎだ」

「エックスです」

「OK、エックス。派手に行こう」

再び最大戦速でV・MAXが発進する。ハンドルをエンカーが捌き、エックスがバスターで迫るラッシュローダーらを駆逐して突破口を作る。一気に群れを抜いた二人にメカニロイド達は方向転換して追撃にかかった。

「スピードはそのままで！」

「あーいよー！」

後ろからミサイルを飛ばしてくるガンボルトに迎撃してエックスには気づかなかつたが、エンカーの顔には笑顔があった。いつものようにスリルを楽しむだけでなく、夢が叶った子供のようなそんな笑顔だった。その間にも彼は横に追いつがるラッシュローダーをマシンガンで牽制し破壊していく。

横からローター音と強風が迫って来る。被ロック反応確認。ハンドルを切り、バイクを斜めにずらす。すぐ横を迫撃用ミサイルが白い航跡を書いて通り過ぎていった。

そして上空から迫る巨大な蜂型メカニロイドを見てエックスが声を上げる。

「ビーブレイダーまで！」

「こいつかぁ、指揮官機は」

自律型強襲用飛行メカニロイド「ビーブレイダー」は口に当たる部分についている銃座で二人を照準する。エンカーは更にスピードを上げて徹甲弾の雨から免れる。

「姿勢そのまま！」

後部座席でエックスが後ろ向きに姿勢を変えるとバスターで追ってくる敵を照準し、チャージ。その顔面へ青い光弾を放つ。顔の半分を吹き飛ばされ、中空で姿勢を崩すビーブレイダーに駄目出しとばかりにエンカーがミサイルランチャーをお見舞いする。頭部を破壊された大蜂は沈黙し、アスファルトを突き破って鉄骨の上でその身を横たえた。

通信コード、037を確認。即座に開く

ジュニア、そっちにも大蜂が二匹行った！

了解

「また来るぞ、今度は二匹だ」

「こつちもナビから確認した。料金所まで一気に突っ切ってくれ。」

そこなら場所もある」

「同感。飛ばすぞ！」

紅いライドアーマーに乗りながらゼロは中央区のメカニロイド暴走鎮圧にあたっていた。片っ端から破壊してはいるものの、きりがな
いと思っていた矢先である。

他の隊員の通信をモニターしている時妙なことになるのに気付いた。敵の数が確認されていたのより少ない。破壊した数と残っているはずの数が合わないというのである。

おかしい。ゼロでなくとも嫌な胸騒ぎがするというものである。別の勢力がメカニロイド達を駆逐しているのか？それともメカニロイド達が全く別の場所へ集結しつつあるのか。前者はともかく、後者はかなり問題だ。敵の戦略にはまった可能性が出てくる。

前方の角から銃声とバイクのギアの音が響く。何故か嫌な予感がさらに膨れ上がった。一際大きな爆発音とともに二人乗りのバイクがラッシュローダーを蹴り飛ばしながら表通りに姿を現し急停止した。

「まったくきりがねえなホント。…クラッシュユ兄は？」
「迷ってなきやとつくに着いてる」

チタン&フォーミュラにまたがる白いレプリロイドとU字磁石…を着けた赤いレプリロイドが得物の弾丸とカートリッジを補充しながら何やら悪態をついていた。ゼロは頭痛を覚えながら急停止した。

「おい…」
「あ」

「あ、じゃねえよ！」とドロップキックをかましてやりたい衝動に駆られたがゼロは堪えた。微妙な沈黙が間に流れる。

「ども、M & a m p ; Gです…」
「よし、次行こうか」
「誤魔化して逃げようとするな！何やってるんだお前ら」

そそくさ逃げようとする二人の首根っこを掴み引きずりおろそうとした時…先の公道で盛大な爆発音が轟いた。その後も間断なく三階建てのビルより高い爆炎が上がる。

ゼロは思わず二人の顔を見たが、二人は青い顔で否定した。そして目の前で瓦礫と共にメガタートスが吹っ飛んできた。ちょうど二人

の後ろで仰向けになった亀が着弾する。

「お、いたいた」

「ジェミニー、マグー、おっひさ〜」

もうもうと粉塵を上げる瓦礫の中から、やたら生き生きした眼のオレンジ色の重装甲型レプリロイドと四角いジツポのようなアーマーを持つ小柄なレプリロイドが出てきた。ゼロは知らないがDWN・013『クラッシュユマン』とDWN・015『ヒートマン』である。思いつきりハンターであるゼロの目の前で名前を呼ばれたマグとジェミニは揃って天を仰いだ。

そこへカブトムシの亜人型レプリロイド、第17部隊のハンター「ビートブード」が巨体に似合わぬスピードですっ飛んできた。ちょうど彼もこのあたりで任務に当たっていたのだ。

「まあたお前からかー！ー！ー！」

「げ、ビートブード」

「関係者かお前から！」

「いや、顔見知りではあるけど…別に俺らがテロリストじゃないよウン」

「嘘こけ！やることなすことどう考えてもお前らの身内だろ！？」

「お前騒ぎ起こすのはとにかく俺らの関係者って決めつけてね？」

胸ぐらを掴んで問い詰めるゼロとまくしたてるビートブードをマグに任せ、ジェミニは二人に応じた。

「何だそつち終わったのか？」

「エアーは？一緒じゃないのか」

「なんかデスログマーっての探しにクラウドと行っちゃったよ〜」

「ナパームたちとアルは？」

「ナパームとウェーブ以外のフィフスはハイウェイの西地区方面、アルは南側のSAから攻めてる」

ついつと視線で戦闘の続くハイウェイを指す。そのとき偶然にもジエミニはハイウェイの端にライドアーマーに乗る紫色の人影を捉えた。双眼鏡を取り出してもう一度確認する。今度は間違えようがなかった。

「…！？VAVA！」

「え！？」

「何！？」

「誰？」

「…あの時」

料金所に着く前に三機目のビーブレイダーを破壊して道が少し静かになった時、後部座席でエックスは唐突に口を開いた。

「うん？」

「何故、ミサイル基地にいたんですか？」

「あー…直感？」

まさか「ハンターからバツジパチって侵入しました」と馬鹿正直には言えない。微妙な沈黙が流れ、直球で聞いてもはぐらかされると察したエックスは溜め息一つ。質問を変えることにした。

「賞金稼ぎでしたね」

「おう、最強と自負できるぜ」

「なら、何故さつき逃げなかったんですか？暴走メカニロイドを排

除してもスコアにならないんじゃない？」

「逃げ道が無かったのがまず一つかな」

逃げ道云々以前にむしろ自分から飛び込んだのだが。

「あと、俺はこの街に来てまだ三年ちよいだが、この街はいい街だ
って思ってる。それを無茶苦茶にされて黙ってられる程、俺は人間
出来ていないだけさ」

「…それで死ぬかもしれないの？」

「安心しろ、この体は特注品でね。ちよつとやそつとどつってこと
ないさ。それに、荒事は得意だ」

笑いながら内心エンカーはエックスに深層にアクセスしたときの記
憶が無いことに安堵した。ライト博士が祖父のことを教えなかった
だけかもしれないが、エックスに対して一切のしがらみも無く話し
合えるのが嬉しかった。

だが、その余韻に浸る間もなくプラズマ球が前方に迫ってきた。即
座にハンドルを切り回避。そして今度は見覚えのある紫色のライド
アーマーが突っ込んできた。

地面すれすれに横倒しになって強引にバイクの方向を変える。タイ
ヤが悲鳴をあげ、エンカーは流れながらブレーキをかけ止まった。

「…ほう？珍しい組み合わせだな」

ライドアーマーの運転手が意外そうに言いながら機体をこちらに姿
勢を向けた。機体の色に合わせたような紫色のフルヘルメットのレ
プリロイドの顔が露わになった。

「VAVA!？」

エックスは思わぬ人物に声を上げるが、経緯を聞き知っていたエンカーは最悪の予想が当たったことを知りながらいつもの調子で応えた。

「よう、VAVA。マグ達から聞いたぜ？拘束されて、シグマの大將に出してもらったって？」

「それがどうしてここに…お前もシグマの反乱に参加しているのか？」

「反乱だと？」

エックスの言葉にVAVAは鼻で笑い飛ばした。その瞬間彼から凄まじい殺気が迸った。

「…そんなもの知ったことか！俺はエックス…お前が気に食わないだけだ！！」

キメラシリーズのライドアーマー「デビルベア」のモンスターエンジンが甲高く唸りをあげ、二人が乗るバイクに向けて猛然と突進してきた。

うむ言わさぬ敵意に即座に反応したのはエンカーだった。アイドリング状態の愛機を急発進させ、放たれた機銃を回避すると全速力で道を通り切った。

「何で…！？」

当然追いかけてくるVAVAを尻目に後ろでエックスが抗議するが聞く耳は持たない。自分を置いて逃げるとか死亡フラグを立ち上げられては適わない。

向かう先にいるアルバイター達に連絡を寄越す。もう粗方終わっているはずだ。

ジャイロ！VAVAと接触した。今そっち側に向かうから合流してくれ。あっちの武装はいつものフロントランナー等とキメラシリズアーマー

はあ？あいつも反乱軍に入ってるの！？

まだ確定じゃないが、とにかくエックスに難癖つけてきた。今後ろからものすごい勢いで追ってきている。全速力で逃走中
わかった。すぐ向かう！

昔丸腰の状態でライドアーマーに乗ったVAVAから逃げ切ったことがあるが、今回は何があっても逃がさないつもりらしい。エンジンを惜しげなく吹かしながら肩についているフロストランナーで追撃してくる。

エックスもバスターで車や街灯を撃ち倒したりして足止めを図るが猛然と迫るライドアーマーには焼け石に水である。

「降ろしてください！奴の狙いは俺です！！」

「見ればわかるし、それが利口なのは認めるが…」

エックスが叫び、更に後方でVAVAが「てめえに用はねえからさつさとそいつを放り出せ」と無言のプレッシャーをかけてくる。シグマの話を真に受けやがって…

「だが断る！！」

「ええ！？」

シグマの盲信のためにエックスを見捨てるという選択肢は無いし、不毛な私闘に付き合っただけやる気もない。相手が知り合いなら尚更である。

打ち捨てられていた車を台にして断絶された道路を飛び越える。弧を描いてV・MAXは無事着地したが、追ってくると思っていたVAVAは急制動をかけて断絶の前で止まった。そしてフロストランナーの斜角を調整しこちらを照準した。悪寒が背筋に走る。エックスも奴の狙いを讀んだのだろう。バイクはビーム砲に撃ち抜かれ吹き飛んだ。

「くっ！エンカー！！」

道路に吹き飛ぶように転がりながら、道路の端で止まるとエックスはエンカーの姿を探した。直撃を受ける前にバイクから飛び降りたところまで見たが、未だ横倒しに転がっていくバイク以外見えない。嫌な予想が浮かぶ。

突然地面が揺れ、エックスは後ろを振り返る。VAVAが断絶を乗り越えてこちらに降り立ったところだった。

すでにフロストランナーがこちらを照準済み。エックスは即座に身を翻してバスターを展開、だがVAVAの方が早い！

「死ね！」

「！！！」

発砲。光が視界を覆う。間に合わない。そう諦めかけたとき、頭の上で何か振りぬかれた。

カキーンと軽快な音と共にフロストランナーの弾が打ち返され、バスターとともにVAVAのヘルメットに直撃した。

ライドアーマーの上で大きく仰け反り、VAVAはそのまま動かなくなつた。そしてエックスの横、バットを振りぬいた野球選手の構えのままエンカーが光学迷彩を解除。

「よし、ストライク！」

「……………」
「あ、電脳錠持つてる？死んで無いし」

呆然と見上げるエックスを見てエンカーはリフレクトスピアを収納すると多目的ハンドガンを取り出し、仰け反った状態のVAVAに慎重に近づいていく。

正気に戻ったエックスはそれを制して自分が行くことにした。デビルベアのエンジンはまだ落ちていない。

バスターを展開し、バイタルエックレーザーで相手が本当に失神していることを確認するとエンカーに後ろに下がるよう指示して慎重に近づく。いずれ処分が決まっているにしても、出来れば生きたまま連れて帰りたい。

ライドアーマーの攻撃範囲ギリギリのところに来たとき、ピクリとも動かなかったVAVAのヘルメットの下の目に火が入る。瞬間エンジンが唸りをあげ、ライドアーマーのアームがエックスに直撃した。

「うわああ！！」

「エックス！？」

咄嗟に後ろに跳んでパンチの威力を軽減させたが殺しきれず、エックスは道路のガードレールを突き破って吹き飛んだ。

淵に手をかけて転落は免れたところへエンカーが走りその手を掴みとる。

だが、安堵する間も与えずVAVAのライドアーマーのアームがエンカーの後頭部を叩きつけるように驚掴みにして締め付けた。

「エンカー！？」

「……っ…大丈夫だ！手離すなよ？」

「エックスといいお前といい、その甘さが気に食わない……」

互いに気遣うエンカーとエックスを見てVAVAは苛立ちとも嫉妬とも取れる言葉を吐いた。

「そこで見ているエックス、貴様には何も出来ん！お前を倒し、シグマを倒し、世界を変えるのはこの俺だ！！」

「やめろっ！！お前の狙いは俺のはずだ！？」

目の前で再び血が流されることに青ざめたエックスが叫ぶ。自分がこの手を放せばエンカーは助かるかもしれない。だが、エックスの手を握る彼の手は頑なにして緩まなかった。必ず助かるという確信が彼の目にはあった。

「くだらないことを言うようになったな、VAVA。…『世界』だと？いつからそんなお題目に縋るようになったんだ？」

「っ！？黙れ！」

くだらない、ただひたすら怒りに似た感情がエンカーの中に湧き上がっていた。その挑発とも取れるその言葉に、VAVAの怒りは一気に殺意へと変わった。

アームに力がこもり、エンカーの頭に激痛とミシミシとチタンの脳殻の悲鳴が聞こえた。このままでは数秒もせぬうちに頭部は破壊されるのが実感で分かった。圧力でバイザーが弾ける。

「っ！」

「やめろおおおっ！！！」

二つの絶叫がハイウェイに響く。無駄なことだとVAVAが更にアームに力を入れようとしたその時だった。巨大な影が彼らの頭上から降ってきた。

見上げればそれは市街でよく流れている軽トラック。明らかな直撃コースにVAVAは反射的にアームを操ってそれを受け止めた。垂直に伸びたそのアームを狙って赤いバスター弾と対装甲ライフルの徹甲弾が貫通。エンカーの頭を絞めていたアームも同様に破壊された。普通ならそこでトラックによって頭を潰されるところだが、VAVAのライダーアーマー操縦のセンスは伊達ではない。そもそも元来工業用のそれを戦闘に用いた最初の人物が彼なのだ。アームを吹き飛ばされた一瞬で足とエンジンスラスタだけで体を捻り、落下するトラックを回避。自分の邪魔をした人物「達」を睨み付けた。

「ちっ、エンジン撃ち抜いてふつとばしゃいいのに…」
「ねー」

「アホ！アルまで殺す気か！？」

「エックス！大丈夫か？」

黄色い四角のロボットを担いだオレンジ装甲の両手ドリルのレプリロイドはいざ知らず、探偵二人はエンカーを助けに来たのだろう。そしてゼロがライドチェイサーでエックスとの間に割って入った時、VAVAの中にくすぶり続けている火が燃え上がった。何故、誰もかれも自分でなくエックスのような者を認めるのだ。

「く…ゼロ…お前ほどの者が何故エックスに肩入れする！？そいつは只のB級ハンターに「VAVAアア！」っ!？」

そんなVAVAの言葉をマグの渾身の怒声が粉碎した。その迫力に彼は一瞬萎縮し言葉を失う。マグは肩を震わしながら怒りで青ざめた顔で煙の上がる街を指さした。

「…俺達の街が無茶苦茶にされてんだぞ？こんな時にお前、何やっ

てんだよ!？」

「少なくとも、奴に対して筋くらいは通すと思っていたが…これはさすがにな!!！」

ジェミニもライフルを構えてVAVAを狙い、ゼロも油断なくバスターを照準する。

「…今のお前は、もはやただのイレギュラーだ…。」
「…!!！」

ゼロがVAVAにそう告げたとき、ちょうどジャイロのヘリが合流した。エックスもエンカーに引き上げられいつでも攻撃できるよう構えている。

両アームを破壊され、袋のネズミになったVAVAだが旗色が悪いとみるものの降参する気配が無かった。

先に気づいたのはヘリを操縦していたジャイロだった。レーダーに大型飛行物体の接近反応あり。識別は第7部隊の旗艦兼空中要塞デスログマーであった。

青い巨体がこちらに向かってくるのがすぐ見えた。ジャイロは激突を避けるため操縦幹をきって回避。風で飛ばされそうになりながらもなんとか機体を保った。

その隙にVAVAは道路の外に飛び降り、デスログマーの翼に着地。そのまま呆然とする一行の前でデスログマーと共に空の向こうへと去って行ってしまった。

「デスログマー!!…マジかよ!？」

「第7部隊…イーグリードが墮ちたか…！」

デスログマーの去った後を見送りながらマグとジェミニは戦慄した。この事実が確実な制空権を手に入れたことに等しい。

「ゼロ…VAVAは一体何を…」

「ただわかっているのは…奴もまた俺達の敵になったということだ…」

ゼロはデスクログマーの去った空の向こうを睨みつけながら言った。親友であるイーグリードが下された事実に対する彼の心中は察するに難い。それでも彼はあくまで冷静なハンターとしての態度を貫いた。

「俺はしばらくシグマの足取りを追う。お前は一旦ベースに戻ってくれ。」

「わかった。ハンターベースで合流しよう。」

「んじゃ、がんばれよ?」

「あの禿には俺を殺しておかなかったことを存分に後悔させておいてやる」

「クラッシュ、バギー乗せてくれ。バイクがやられちゃって…」

「おう乗ってけ。エアアの奴探しにいかにならんし」

エックスの後ろで爽やかに去ろうとする怪しい一行をゼロは逃がさなかった。

「お前から帰れ。あるいは取調室に來い」

「だが断る」

「前者はともかく後者はヤダ」

「こちらゼロ。ビートブード、重火器不法所持と建造物破壊の容疑者5名を確保。場所は南地区料金所前。エックスを回収していくついでに連行してくれ」

>おう任せろ!つかあの二人なら連行と言わずその場で鉄板にしてやる!!--<

「24時間年中無休、ペット探しから浮気調査まで！」

「料金は要相談の良心価格な私立探偵、マグネット&ジエミニとは我々のことだ！言っておくが俺が探偵！こいつが助手！間違えても逆ではない！！あと便利屋でも壊し屋でもない！」

何やら日ごろからどういふ目で見られているのか自覚していることを無駄に主張するジエミニであったが、これも営業努力である。ただでさえ何人かのイレギュラーハンターに目の敵にされているのだ。主にカブトムシとか

「相棒がガチャガチャ五月蠅いけどご愛顧夜露死苦！あ、ちなみにこれ銃器取扱いの免許証」

「……」

何やら目の前の二人に随分昔に会ったことのあるような既視感を覚えながら、とりあえずエンカーにも礼を言わねばならない。

「あの… すいません！ずっと助けられっぱなしの上怪我を…」

「あー大丈夫。皮膚がはがれたわけじゃなし骨格も損傷無いから。バイク弁償してくれるだけで十分だし」

何でもない事のように言いながらエンカーはエックスに応えた。何か腑に落ちないものを感じたが気のせいだ。多分（職務上当然である）

「ニーチャン、コイツの場合危なそうなところにお前が>いたくのが理由だから気にすんな。100年たつても変わらんバカだし」

「クラツシュ、そういう言い方はないだろ？」

「本当のことだろ？てめえの強度考える強度を。あれに捕まったら

お前のチタンの脳殻なんざトマト並なのわかってるだろ」
「アルだっこして〜！」

無然としながら説教するクラッシュの横でマイペースなヒートがエンカーに無邪気にだっこをせがむ。エンカーは「耳タコ」な渋い表情をしながらもヒートを抱えた。

そこへ内心憤然とするクラッシュの下へ通信が飛びこんできた。コード052、クラウドからである。コード010、エアーに通信しようとした矢先に…めんどくさそうにラインを開けた。

「クラウド。一応こっちは終わったが取り込み中…あん？」

一瞬でクラッシュの顔から熱が下がっていった。そして空にいる通信先の相手に怒鳴る。

「エア―！バカは止せ！！対戦車砲でとれる相手じゃねえだろ！！戦艦だぞ！！止め…！」

黒煙の向こうの白い雲の上で遠雷のような爆音が響いた（と言っても、人間の聴覚では聞こえるどうかという音だが）。デスログマーが去って行った方向だ。

続いて何か煙を吹きながら街の外の方へと落下していくのが見えた。そして墜落し高い粉塵を上げるのを、クラッシュたちが顔色を失いながら見た。

「あんの…バカ！！ヒート！先に行け！！」
「がってんだー！！」

クラッシュは自分の装甲を解放して雷管式爆弾「クラッシュボム」数個をヒートに投げてよこした。ヒートは地面に降りてそれを嬉々

として受け取ると足を収納させて炎を噴出させ目的地に飛翔した。

「ジャイロ！へりに乗せる。エアーが負傷した！」

「はあ！？今のアレか？」

「エックス、ごめん！身内がやられたらしい。マグ、ジエミニ！先に帰ってて！」

クラッシュとエンカーは血相を変えてジャイロのへりに乗り込んだ。日は落ち、街は夜になろうとしていた。まだこれが過酷な戦いの前にすぎないと、そう囁くような暗い夜が迫ろうとしていた。

廃墟の中に強い夕陽の光が差し込み、影を作る。

舞い上がる粉塵ですら、美しいオレンジの粒子に変えていく光景を、エアーはクレーターの中で無感動に見ていた。

「…ふう」

持っていたライフルは落下中別の場所に落ちたのだらう。多分吹き飛んだ左腕も一緒だ。

煙が薄れ、赤い夕陽がエアーの視界に映る。何年たっても変わらない景色の中にデスログマーの機影が見えた。

小さく煙をあげながら悠々と飛び去っていくその姿を、かつてそれを指揮していた男を思い出しながら、そしてその誇りを辱めたシグマの影を見ながら、彼は大の字になって深く溜め息をついた。

模倣者達は踊る(前書き)

そろそろこっち中心で投稿するかも…

今回は部隊編成です。

模倣者達は踊る

地平線に赤い夕陽が落ちかける頃、デスログマーの艦内は機体の損傷の確認で少し慌ただしいことになっていった。

突然発生した乱気流からの奇襲。しかも信じられないことにレプリロイド単騎と複数の攻撃メカによる対戦車砲での強襲である。クルーは全員肝を冷やしたが、幸いイーグリードのとっさの判断によってデッキへの直撃は回避できた。

「イーグリード隊長、調査の結果損傷は装甲の破損のみです。艦の飛行に問題はありません。引き続き、目的地への運航を続行します」
「うむ」

部下の報告にイーグリードは頷いた。しかし、報告を終えた部下は思いつめたかのように黙ると俯いたまま零すように言った。

「隊長：本当にこれで良かったんでしょうか？」

「みなまで言うな……」

それはこの場にいる第7部隊全員の本心でもあった。シグマに力によつて屈服してしまったイーグリード本人にしてもそう返すしかない。全員の中に無力感と苦渋が満ちていた。

そこへ突然デッキのドアが開いた。ライドアーマーとともに回収されたVAVAである。デッキが一気に剣呑な空気に変わるが、それに構わず無言でイーグリードの前まで歩き、隊員を押しつけて彼を睨み付けた。イーグリードも微動せず睨み返す。

「…恩には着んぞ？」

「結構だ」

一触即発の空気が流れたが、「ふん」とVAVAは吐き捨て空気は霧散した。しかし剣呑な空気が消えたわけではない。通信を知らせるコールがデッキに響く。隊員が「シグマからです」と短く報告し、モニターにつないだ。

>無事合流できたようだな、VAVA<

モニターにいつか知らぬところで座るシグマの姿が映し出される。その顔にはミサイル基地でエックスにつけられた傷がそのままついていた。それがまたこの男の不敵な笑みを凶悪なものに見せる。

>各地で我が意に賛同する者たちが蜂起した。お前はどうする？VAVA<

「シグマ…俺には俺のやり方がある！貴様はそこで見ているがいい…」

モニターを睨みつけながら、VAVAは底から響くような声でかつての上官に宣言した。その場にいる全員が燻りつつける暗い炎のようなものを感じたのは言うまでもない。

>…ふむ、よかろう<

シグマはわかりきった答えを聞くように、確認であるかのように薄く笑いながら言った。それだけで通信は終わった。

しばらく沈黙していたがやがてVAVAは格納庫のへと戻って行った。暗い炎を纏わせたまま、去って行くその後ろ姿が見えなくなつてデッキの中に安堵の息が次々吐き出される。

だが、イーグリッドは新たな胸騒ぎを覚えていた。

このから始まるのはシグマ率いる反乱軍とイレギュラーハンターと

の戦いになるはずだった。だが、狙ってきたかのような「A10」の奇襲といい、今しがたのVAVAの宣戦布告じみた言葉といい、「それだけでは済まない」と直感が告げていた。

これから過酷以上に混沌とした戦線が開かれることを、イーグリードは予感していた。

そして暗い通路の中、VAVAは誰に向かって言うのでもなく呟いた。

「今にわかる…貴様の言う可能性とやらが誰なのか、な…！」

第二のテロ騒ぎが一応の収束を見せ、マグとジェミニはイレギュラーハンター本部から解放された。

というのも、二人が暴走メカニロイド以外破壊していないことが証明されたこと。あと、遭遇したクラッシュとヒートは特に素性は上がらなかったが、非合法の傭兵として活動していることが判明したので、行方と共に依頼主を調査中。ただしシグマとの関連性は薄いと判断された。以上をもって二人は銃器の没収された後釈放されたのである。

ただし、固有武装のみならず体のいろんなところ（玄関前の茂みの中とか）に隠した武器はかなりあったので、二人にとっては特に痛くもない損失だった。足りない分はシャドーの組織から補充してもらえばいい。

しかし二人の心は晴れない。尋問が厳しかったとかそんなことではない。

エントランスから外へ出ようとした時、被災者の救助を手伝っていたエックスとすれ違った。その時マグはエックスを呼び止めて一言言った。

「エックス、悪かったな…」

相手は当然何のことかわからず怪訝な顔をしていたが、二人は返事を聞かずそのままイレギュラーハンター本部を後にした。チタン&フォーミュラで公道に乗ってシャドーの店に向かう間、二人は無言だった。ただ、独房の中で聞いていたシグマとVAVAのやりとりを思い出していた。

『エックスを倒すだと…!?!?』

独房の中に戸惑うVAVAの声が木霊する。マグもジェミニもその時には異常な事態に気づいて息を潜めていた。

何故ここでエックスが　いくらライト博士の忘れ形見の可能性があるとはいえ、「ただそれだけ」のお人よしを倒す話ができるのか理解できなかった。

『そうだ。ひいてはそれが我々の進化につながるだろう…』

『何を言い出すかと思えば…』

シグマの言葉にVAVAは当然失笑し、そして激怒し立ち上がった。当然である。少なくともVAVAにとっては格下の相手だ。

『あの悩んでばかりのアマちゃんハンターが、何をしてくれるというのだ!?!』

『悩む…そう、　悩む　ことこそが他のレプリロイドにない特殊能力だ』

だがシグマはそれを否定することなく、静かに言葉を続けた。

『甘さゆえにエックスは悩み、深く考え、通常のレプリロイドが達しえない結論に達しえるのだ…だが、エックスはその本来の力に気づいていない』

確かにレプリロイドは生まれながらにして役割を決められている以上、疑問を持つことや悩むことは少ない。戦闘型であれば尚のことである。

しかし何だか話が壮大におかしな方向に行っている。二人は嫌な予感がしてきた。

『そのエックスの力を引き出すために、自らいレギュラーになるというのか？』

『そうだ』

シグマはにべもなく即答した。

『俺にその手伝いをしろと？』

『だからここへ来た』

外からの震動が再び響く。長いようで短い沈黙が横たわり、VAVは吐き捨てるように呟いた。

『狂ってやがる…！』

『強制はしない。誰にでもできることではない』

シグマがうすく笑ったのが空気であった。そして彼は踵を返し独房から去る際にこう言い残した。

『自ら狂うことのできる者でなければ…』

VAVはしばらく呆然と立っていた。だが、やがて彼はシグマの後を追うように独房から出ていったのである。行くな。

そう叫ぶだけで何かが変わったとは言えない。独房から出る手段は無かったし、何より丸腰だった。あとでアストロから聞いた話ではあの時には既にVAVAの「処分」が決まっていた。VAVAに選択肢は無かったのだ。

しかしそれでも、知った顔が道を外すのを目の当たりにして傍観に徹していたことに変わりはない。

「…お前のせいじゃない」

運転中黙っていたジェミニが後ろのマグに呟くように言った。それに対してマグは何も返さなかった。そうしている内に、二人の視界にBar「明月」の看板が見えてきた。

非常事態宣言により閉店中の「明月」の最上階は「影」の面々を始め、今回新たな都市伝説を生み出した「時給戦隊アルバイター」他、今しがた合流したクラッシュ、ヒート、クラウド。マグとジェミニが顔を合わせていた。

全員が店内に設置された大モニターに流れるニュースに注視している。既に何度も第9部隊がSWATと交戦した件についての追及が報じられているが、今は国外へと消息を絶ったデスログマーと第7部隊の行方を始め、国外へ脱出した反乱軍の動向が焦点に充てられている。

イレギュラーハンターもついに情報公開に踏み切る決心をしたらしい。リストに上がる物々しい顔ぶれは昨日までメカニロイド一斉暴走事件を境に行方が知れなかった特A級ハンターばかりであった。中にはイーグリードの姿もある。

「ふう、終わったよ」

ちょうどエレベーターから狭そうにエンカーもといアルフォンスと

修復の終わったエアーが出てきた。

「状況は？」

「E国発電所、太平洋横断橋跡、ブラジルのIH支部、並びにコロンビアの国有Eクリスタル鉱山。以上が反乱軍によって制圧されました。現在多数のレプリロイドが国外へ脱出したことが確認されています」

「それと未確認情報ですが、北極の第13部隊とサウジアラビアの第4部隊が3時間前音信を絶ちました。北極は副隊長のアイシー・ペンギーゴが消息を絶っていることから造反されている可能性は極めて高いと思われます」

「少なくとも、シグマの直属の部下何名かを始め、第4、第6、第8、第7、第13の部隊が反乱軍に組み込まれたと考えるべきか……」

アルフォンスは呻くように言った。「全く、とんだ茶番だ……」とジエミニがニュースに目を通しながら吐き捨てる。

「ところで、どれだけのナンバーズと連絡が取れた？」

「ウェーブとバブルは太平洋。ナパームは中東だ。例の放送聞いてからもう動いているらしい。南米にいる傭兵組もウッド達と合流するって」

クリスタルが説明した後、サードナンバーズのマグとジエミニは指で自分たちのナンバーズの人数を数えながら言った。

「スパークは確か発電所で働いているし、ハードとニードルはコロンビアで土建のバイトしながら基地で留守してるし……あとは」

「スネークとタップは去年から連絡がつかん。一応働き口が見つかったとかいっていたがな」

タップは…チベットに行くと言ってそれきりである。今頃マニ車のごとく回っているのかもしれない。「ま、いつか…」と諦観に似た思いが二人に在った。

「あーと…メタルは欠席だ。クイックはどこいるかわからんし、フラッシュは論外」

バツが悪そうにクラッシュが手を挙げた。

「え？あの兄鬼が」

「嬉しそうだなオイ」

「エ？ソナコトナイデスヨ？」

驚きつつも心なしに嬉しそうなマグに思わずツッコむクラッシュの代わりに、今まで黙っていたエアーが説明した。

「『守るものがある』と言ってな。そのまま日本に留まるそうだ。

実際太平洋横断橋跡が占拠されて以来東京付近がきな臭いらしい…」

「…例の予測演算装置の答えか？」

「そこまではわからん。今は個人的推論と直感に基づいて行動中とのことだ。一応国内にいたテングを向かわせておいた」

日本には企業によって洋上に建てられた環境改善ナノロボットのプラントが存在する。民主主義の自治国家として存在する日本にシテイの介入は入りづらいし、廃墟同然になった東京には今中国からの戦災難民に混ざって海賊やマフィアがごった返している。

「クイックはNYシティにいるのをターボとスプリングが確認している。だが間違いなくこの戦に参加するはずだ。フラッシュだが…」
「ほっとけつての、あのバカ」

クラッシュは吐き捨てるように遮った。アルフォンスもそれ以上は追及しない。DWN・014「フラッシュユマン」が自分を認めていないのは知っているし、軍団を離れるきっかけを作ったのは自分の非だ。

「…シールドたちの方はどうなってる？」

「アラスカにいるフリーズの説得に向かっております。つい先ほどカナダで興業中のクラウンとフロストに合流しました」

「ふむ…こんなところか。反乱軍がこうも広がっていると、分隊にしてそれぞれの制圧地に出向くべきだな」

報告を聞き終えて、エンカーは敵の分布と今後の動きについて思考を巡らせた。するとエアーがゆっくりと部屋から出ようとした。

「どこいくの？」とヒートが声をかけるとエアーは振り返らず言った。

「デスログマーを追う。イーグリードには『A10』を名乗っていた頃からの借りがある。クラウド、また付き合ってもらうぞ」

「え〜！？また戦艦に単身突貫なんて無茶はもう嫌だぜ？」

そこには有無を言わさぬ確かな決意があった。名指しでつき合われる身になったクラウドは思わず悲鳴のような抗議をあげる。

「心配するな。ドラゴンも連れて行く」

「アンタはそれでも突っ込んでいきそうなんだよ！」

「まあまあ。エアー、悪いけどクラウドは俺と一緒に南米に来てほしいんだ」

二人のやりとりにアルフォンスが割って入った。「俺様？」と怪訝

な顔をするクラウドに反してエアーが即座に得心していた。

「…なるほど、第9の隠れ蓑対策か。だが、雨のジャングルの恐ろしさはお前も知っているだろう？」

「嫌になるほどな。だが、向こうにとってもそれは同じだ。それに、早いうちにカメラーオから情報を引き出しておきたい。奴のことで、多分反乱軍に入れるために人質取るくらいはやってる」

「ふむん…」

そのやり取りを見ながらクラッシュは溜め息をつくと、ヒートを抱えて席を立った。

「んじゃ、俺は中東でナパームと合流するかな？あのオイルデブなら勢いで蜂起しかねんし」

「ねーねー！その人よく燃える？」

「おう燃えるぞ。しかも天高く」

「燃える！」

小脇に抱えられたヒートが文字通り目を輝かせて嬉しそうに気炎を吐いた。まるで宝物を探しにいく子供のようにである。

「そんじゃ、ちょっと第4部隊潰しに行くわ」

そしてクラッシュたちはまるでそこらに買い物でも行くような足取りで出ていくのであった。

「…まあ、中東はクラッシュたちとナパームに任せりゃ問題ないかな？」

「ジュニア…戦力的に問題なくても周辺の被害予想的に問題です」

片や雷管付き爆弾をばらまく壊し屋、片やその気になれば12000度の高温を纏って突進する炎口ボット。そこへナパーム弾等ミサイルをばらまく殲滅型である。（戦場が更地になる意味で）完璧だ。

「まあ市街戦にならないことだけを祈っておこう…」

その場にいる全員が第4部隊全員の冥福を祈った。まだ部隊の全員が反乱に加わっていると確定していないのに…

「エアーには飛行メカたちを増員してデスログマーを追ってほしい。でも、俺たちが合流するまで決して深追いはしないでくれ」

「…承知した」

「さて、あとは…」

そしてアルフォンスは全員の有志に基づいて、それぞれの分隊を編成していった。そして翌日の朝、それらは各地の制圧地へと向かった。

模倣者達は踊る（後書き）

「なあ、エアールちゃん。A10って何の暗号？」

「俺の傭兵としての名前だ。No.10で『Airman』の頭文字を合わせた」

「なるほど」

「ちなみにクラッシュは『DEATH13』だ。何故かスネークがそう付けた」

「…悪夢の中で殺されそうなネームだな」

はい、キーワード

百年凍土（前書き）

アラスカでのお話です。

百年凍土

アラスカ北東部。地元の動物たちでさえ外に出ることを辟易する猛吹雪の中、一台の雪上車が消え入りそうになりながら走っていた。

「あと少し…あと少しだ」

ハンドルを取られそうになりながらも、第13部隊の隊員は自分の中の記憶を頼りに目的地を目指して運転していた。

体内のGPSは途中で捨ててきた。視界の効かない追っ手の目を眩ますためだ。身分証明も兼ねていたが、致し方がない。

彼はつい先程まで仲間だった者達から命からがら逃げてきたのだ。このまま進めば町に着く。そこまでいけば助かる。そう信じて彼はアクセルを踏み続ける。

助手席で呻く声が聞こえる。彼は声の主を励ます。

「もうすぐ町です。必ず助けます。マルス隊長」

助手席でマルスと呼ばれた大柄の壮年レプリロイドは目を閉じたまま、ゆっくり頷いた。その胸には無惨に穿れた穴と応急措置のための機械が取り付けられている。

白い闇の中、彼らの視界に廃墟の影と人工の光が浮かぶ。

隊員はその光に向かってアクセルを踏み抜いた。

フリーズ 正式名DWN・049『フリーズマン』にとって世界は終わっていた。

大戦の引き金である核ミサイル発射を軍団のせいになされ、地下に潜り長い眠りについた。

それだけならまだ良かったが、その後も放たれた核ミサイルが日本の首都にも直撃した。あの街には、尊敬する先輩が 『アイスマン』 たちがいた。

熱で捻れ、瓦礫と化し、静寂が支配する廃墟。死の街と化した彼らの故郷。ついこないだまで（少なくとも、彼らの体感時間でだが）何度も訪れた街とは信じられず、他の兄弟同様立ち尽くしてしまっ

た。
ライトナンバーズがこの人災から生き延びることが出来たか、殆どの情報が失われたので定かではない。だが、どちらにしてもこの人類の過ちが彼らに深い絶望を与えたのは想像に難くない。

目覚めた時、彼にとつての『世界』は死んでいた。

その後も、彼は兄弟とともに荒廃し分断された世界を回った。そしていまだ終わらぬ紛争と対立。ありとあらゆる理不尽と暴力が実行される現場を目の当たりにした。

歩くたびに、虚しさが彼の心を蝕んだ。人類の為に尽くしてきた彼らが哀れだった。

失踪した主と末の弟を探す使命が無ければ簡単に膝を折っていただろう。だが、シテイ・アーベルに弟がいるとわかった頃には限界が来ていた。

『一人で考えたい』

弟の処置について集まった兄弟達とともに話し合った後、フリーズは主に一人出奔することを願い出た。

新しい主に不満があつた訳ではない。ただ、世界に対する絶望で磨耗しかけた彼は一人静かに今までを問い直す時間が欲しかった。

厭世に囚われたと言えればそれまでだが、主のアルフォンスは現在のネットワークに対応出来るようバージョンアップすることを条件にそれを許した。

皆が自分の道を探す時期だと主は言った。

軍団を出奔したフリーズは一人で南極大陸以外の寒冷地を回った。もともと寒冷地対応の氷属性ロボットである彼には相性のいい土地

であったし、アイスマンも元は極地探査用ロボットであった。流れ流れて、彼はアラスカ北部の放棄された町に辿り着いた。最初は町外れにあった小さな図書館に住み着き、本や資料を読み漁っていた。特に意味はない。元来の趣味である。

町にサリンが撒かれた跡があつたが、ロボットである彼には空腹の心配は無かつた。

様子を見に来た兄弟に『引きこもり』と言われたがそんなことはどうでもいい。

時折近くで米帝とカナダ軍との抗争が発生する以外なんの変化もない生活だつたが、時とともに周囲は変化していった。

まず、ひさびさに街の外を回った時、衰弱したシベリア犬の雌に遭遇した。

タグをつけていたから多分軍用に運営されていたのがはぐれたか捨てられたかのどちらかだろう。しかも妊娠していたとあつては放っておけない。それからフリーズは新しい家族のために町にある食べれるものを探すこととなった。

次は町にエスキモーを含めた難民がやって来た。カナダ軍の略奪から逃れてきたらしい。

まだ『ロボット』といえは軍の兵器というイメージの強い時世である。いらぬ誤解でいさかいを起こすわけにはいかぬと、フリーズは即座に町外れの小さな軒屋に移った。犬達はエスキモー達に大切にされるとわかつていたので置いてきた。

しかし…

「しばらくした後、犬達が探しに来て、そしてその跡をつけてた村人にバレました。…と」

「やっぱり警戒されたけどね。でも犬達のおかげで信用してもらえたわけだが…」

この種の犬は帰巢本能が低いはずだと思つたのに…とフリーズは『

世界の犬種』を読みながらぶつくさ呟いた。

「いいじゃないですか。感動的で。とにかく本当の引きこもりよりマシになって安心しましたよ」

暖炉の前で横になる犬の腹を撫でながらシェードは言った。

「で、話なんだが…」

フリーズは読んでいた本を閉じた。

「軍団に戻る気はない」

「例の放送、聞いたでしょうに」

「心配しなくても賛同する気は更々ないよ。胡散臭いし」

本を「借り物」と書かれた箱に入れながらフリーズはふと窓の外を見る。

遠くに見える町の図書館の中で、道化師のような腕の長い小柄なロボットとイグルーのような巨体のロボットが子供達と遊んでいる。二体と同じDWNの060『クラウンマン』と062『フロストマン』である。二人は覚醒してからは手下のメカを連れサーカス興行で各地を回っていた。

「あの二人を連れてきてくれて良かったよ。例の放送から町のみんなはピリピリしてたから」

「たまたま近くで興行していましたからね。話を聞かせたら快く引き受けてくれましたよ」

窓の外はかなり吹雪いていたが、町の子供たちには関係ない。サーカスが近所に来たと知るとすぐに家を飛び出した。

町は少しずつ明るさを取り戻していた。

「もう一度聞きますが…坊っちゃん達と合流するつもりは？」

「ジュニアには悪いけど、今女子供と老人ばかりだから…」

シエードから溜め息が漏れる。まあ、解りきっていたことだが

「ま、坊っちゃんも強くは言ってますからね。私からもこれ以上は言いませんよ。ただ…」

吹雪が窓を叩き、暖炉の薪がパチリと弾ける。

「今から三時間前、イレギュラーハンター第13部隊のアラスカ駐屯地が逐電しました。ここからそう遠くないでしょ？」

「…たまに隊員が巡回に来るくらいだけどね」

「反乱の翌日、副隊長のアイシー・ペンギーゴも消息を絶っているので、もしかやと思ひましてね…」

二人の聴覚に吹雪の音とは別の人工の音が届いた。暖炉の前で寛いでいた犬もそれに気づき、飛び起きるように立ち上がった。

「ハンターの雪上車のエンジン音だ」

窓の向こうに目を凝らすと、吹雪の向こうから二つの光が近づいてきた。

家の前で車が止まり、中から13部隊仕様の白いアーマーのレプリロイドが転がるように降りてきた。

ただならぬ様子にフリーズはシエードに奥にいくよう促すと、けたたましくノックされるドアを開けた。

外の吹雪とともに隊員は倒れ込むように家の中に入った。相手はフリーズも顔見知りの隊員だった。

「アランか!？」

「フリーズさん! 助けてくれ!!」

アランは出迎えたフリーズの二の腕を掴み、絞り出すように叫んで懇願した。

「マルス隊長が…!」

図書館の二階で子供達に簡単なマジックを披露していたクラウンは窓の外で銃痕だらけの雪上車がフリーズの家を駆け込んだのを見て、厄介事が転がり込んだと確信し、内心で舌打ちした。

相棒のフロストも気づいたようだが、子供達を不安させないため口止めし何もないう振る舞わせる。

観客に笑顔を与えるのがサーカス興業の使命だ。ただでさえこないだまで戦災難民として苦しんできた子供ばかりである。

「さあさあ、次はエジプトでも使われた最初のマジックだよ!」

クラウンは子供達に悟られぬようマジックを披露しながら、ナンバーズの暗号通信でシェードに呼び掛けた。

シェード、何かハンターの車がけつに火いつけられた勢いでそっち行っただのが見えたが。厄介事か？

まあ、そんなところですね。今13部隊の隊長と付き添いが死にかけで転がり込んで来ました

え〜!?! マジかよ!

詳しいことはまだですが、この辺りのハンターは制圧されたとみていいですね

空気読めつての。明日公演やるんだぜ？

とりあえず、貴方はそのまま子供達に悟られないように振る舞ってください。もうすぐこちらに村長達がやってきます。こっちで説明して説得しましょう。パニックを起こされてはかありませんからね

簡単に言ってくれませ

通信を終え、シェードは奥からアラン隊員とともに瀕死のマルス隊長に救命措置を施すフリーズを影から覗く。

ちょうど処置が終わり、アランが安堵とエネルギー不足から気絶。

そのまま床に倒れ込んでしまった。

二人で彼を抱えてソファアベッドに寝かせ、フリーズはやっと一息ついた。

「ペンギーゴが反乱軍に加わったのは間違いなさそうだな」

「ほう、その根拠は？」

「傷口の周りが凍ってた。出来立ての氷柱を銃弾の威力で撃たないとああはならない……」

「成程、しかし逆も考えられますよ？マルスが反乱軍に加わろうとしたのをペンギーゴが……とか」

「無いな。マルスは自分の意志でシティ勤務から実験部隊に入っここっちに来てたし、町の皆とも仲が良かった。ペンギーゴは……」

フリーズは思い出したように溜め息をついた。

「設計図の段階でここ向けの癖に僻地暮らしに飽きてた節があった。あいつはこの土地に未練はないよ」

「なるほど」

反乱軍に入る理由にはならないが、フリーズの言葉には説得力はあった。

「まあ、とにかく。南米にいる坊っちゃんに連絡しましょう。ここでは延命くらいしかできませんでしょう?」

「…この吹雪じゃシティと連絡は取れない。Eクリスタルもアンカレッジまで行かないと無理だ」

正直二人をペンギーゴに引き渡せば早い。しかし、向こうに交渉する気があるかどうか怪しいし、引き渡しを要求される前に見せしめとして町が襲撃される可能性もある。

「全く…ちょっと外出るとこんなことばかりだ」

人間がいなくなっていたお陰で、ここ一帯の自然は一気に回復していた。

だが、今も人間同士の抗争は無くならない。それを調停するために現れたレプリロイドも新たな火種となった。

「平和なんぞは風に過ぎませんよ。吹雪がやむまで私もこの町にいきましょう」

「…助かる」

夕方が迫り、曇天が一層暗くなる。子供達が家に帰る頃、吹雪は更に激しさを増した。

まるでなにもかも吹き飛ばすようなそんな激しさだった。

百年凍土（後書き）

最近調べて初めて知ったんですが、北極って「北極海を含めた北極点周辺の総称」なんですね。

… 中学の世界地図ひっくり返して驚く馬鹿がここに

北端の混迷（前書き）

戦車やサイボーグ兵士を相手に銃弾を掻い潜ってきた人間の皆さんは遅しいです。

北端の混迷

オレンジ色が星の輝く藍色に交代する頃、エックスは輸送用ビーブレイダーの中で一人休眠状態から目をさました。気温・20 を記録する高度二千メートルでも反重力装置を搭載しているビーブレイダーの中は静かなものである。

あと二時間で目標地点に到達します

無機質な艦内放送が現在地を告げる。エックス達はレプリフォース極北基地に向かっていている途中である。

現地にいるレプリフォースとともに、音信を絶った第13部隊の状況を確認しにいかねばならない。既に反乱によって制圧されたという見方が強いが、エックス個人としてはそうであって欲しくないのが本音だ。

消息不明のペンギーゴはひねくれたところはあるが、シグマの言葉を真に受けるとは考えにくいし彼自身ハンターであることに誇りを持っている。

それに何より隊長のマルスはアラスカの土地を愛して13部隊の前身である環境観察実験部隊に志願した男である。

進化という名目で破壊活動を行うことを、温厚で実直な彼が許すはずがないのを知っていた。

その第13部隊アラスカ駐屯地から連絡が来ない。つまりそれは基地の通信手段が絶たれたか、マルス自身の身に何かあったということだ。

「無事でいてくれ…マルス」

エックスは誰にも聞こえないように、冷たい夜空に向かって祈った。

マルスとアランを奥へ移し、雪上車をガレージに隠してから一時間後、村長のウッドチャックと元アンカレッジ市警のジェイコブがフリーズの家を尋ねた。

エンジン音を聞いて駆けつけてきたそうだ。

隠しても不穏と不安を煽るだけと判断したフリーズは奥にいる二人の経緯と状況を説明した。

「やはりあの放送が狼煙だったか…」

老いたイヌイットは重々しい口を開いた。

「恐ろしい…あれだけの血が流されたのに、人間どころかレプリロイドまでその様な過ちを行う」

「シティの方はどうなっているか聞いていないか？まさかイレギュラーハンター全員が反乱を起こした訳じゃないだろ」

フリーズは村の者に最初に大戦の終結、そして終戦の後始末を務める総合管理局とシティ・アーベルの存在を伝え、「自分は調査のためそこから来た」と説明している。

だから村の全員はフリーズをシティから来たレプリロイドと思い込んでいるのだ。

ジェイコブの質問にフリーズはしばらく考えてから答えた。

「放送で流された以上は不明ですけど、向こうも混乱しているのは間違いないと思います。海外組はもちろん、かなりの数がシグマに賛同したんじゃないかと…」

それを聞いた二人は考え込むように唸った。

「統合管理局に救いを求めても手が回らないか…」

ジエイコブはため息混じりに呟いた。

村と言っても、ここは非公式の難民キャンプであり、下手すると自分達は戦争のドサクサに住み着いてる不法入居者の集まりである。また戦争が始まれば肅清という名の略奪に遭いかねないし、逆に法が戻っても立ち退きという形で追い出される可能性もあるのだ。国同士のいさかいで故郷を追われる羽目になった住人達には、国に助けを求めるなどもつてのほかだった。

今までは隊長のマルスの人格もあって、地元に近い第13部隊が周辺の治安維持や村の電気設備などの設置に当たってくれていたが、管理局が味方になってくれたとしてもマルスの迎えが来るのも、北極の不穏な動きが鎮圧されるのも先になるだろう。

それ以前に気づいてくれるかだ。村を囲む状況は絶望的に等しかった。

自衛するにも武装は古い型の猟銃とアラン達が難民と合流する前に署から持ち出した押収品の銃火器類。既に弾薬も心許ない。

考えても仕方ないことを悟った二人はそれこそ仕方なく席を立った。

「とにかく、今は住民に呼び掛けて戸締まりすること。それから見張りを交代で立てることを呼び掛けよう。いざって時の避難場所も整えないと…」

「マルスとアランは引き続き診ましよう」

「頼んだ。二人に何かあったら報せてくれ。詳しい話を聞かねばならないし、大事な友を見捨てるわけにはいかん」

それから、とウッドチャックはフリーズを真っ直ぐ見た。

「フリーズ、お前もまた我らの友だ。子供たちもみな、お前に沢山

の言葉と知識を教えてもらった。我々もお前に恩を返したい」

フリーズは無言でその言葉を聞いていた。

「くれぐれも、犬達の時のように一人で危険に立ち向かうことはするな。我々もできる限りの助力は惜しまん」

それだけ念を押しして、ジェイコブとウッドチャックは家を後にした。

「信頼されていますね」

「何、家電の修理と子供達に本の読み方を教えただけさ」

人間達がいなくなったことを確認して出てきたシェードにフリーズは素っ気なく返した。

「クラウン達のためにも明日には晴れてほしいところですが…それはそれで危険ですね」

「体内のGPSは途中で捨ててきたみたいだし、車内のそれも外してきたみたいけど…時間の問題だな」

今この吹雪が町を孤立させると同時に外界から守っている。どんな機械化部隊でもこの吹雪の下で行動するにはリスクが大きいからだ。

だが翌朝、二人の危惧通り吹雪が止んでしまった。アランが意識を取り戻したのは丁度その頃である。

逃走とその際の戦闘による疲労で倒れたアランは休眠から目覚めるとすぐに起き上がることができた。

だが、人間で言うところ心臓の無い状態のマルスは予断を許さない状況には変わりない。

機械と管に繋がれ、変わり果てた隊長の前でアランが打ちひしがれ

ていた頃、連絡を受けたウッドチャック達が駆けつけてくれた。町の代表が揃ったところで、何とか落ち着きを取り戻したアランはことの次第を語り出した。

「シテイにある本部と連絡が取れなくなって二日目です。ペンギーゴ副隊長が帰ってきました…」

シグマの反乱が各国に放送された矢先、状況を確認するために基地にいる誰かを派遣するか否かで揉めていたところだった。

一つでも新しい情報を欲しがっていた一同は何の警戒もなくペンギーゴを基地に入れた。そもそも、彼の本部出張は極地にレプリロイドの活動報告を兼ねたものだったのだ。

彼の口から大型メカニロイドの一斉暴走、そしてミサイルの発射に伴うケインラボの崩壊。大半のハンターが反乱、もしくは消息不明など次々とシテイでの惨状が明らかになった。

「それでペンギーゴ副隊長はマルス隊長に今後の方針を尋ねたんです。いつ来るかわからない本部の助けを待つか、それともシグマに付くのか…」

「そういえばあの時、いつもならず自分の意見をはっきり言う副隊長が何も言わなかった…」とアランは溢した。

「マルスは…シグマに与することをよしとしなかったのだな？」

「はい…」

ウッドチャックの問いにアランは絞り出すように答えた。

「副隊長が…ペンギーゴが反乱を起こしたのはそれからしばらくしてからでした」

司令室で何かが砕ける音がしてアランが駆けつけた時、彼らが見たのは心臓部に氷の弾丸を撃ち込まれて倒れ伏すマルスト、そのマルスから脳殻を外そうとするペンギーゴの姿だった。

「多分隊長から基地の機密コードを抜き出そうとしたんだと思います。それで、うちの副隊長が裏切っていたことを知りました…」

「なんと言うことだ…！」

「隣にいたブリッツがペンギーゴに発砲しなかったら、多分立ちすくんだままだったでしょう。それで何とか奴を引き離して、隊長をひきずりながら基地を脱出しました」

かつての副隊長を「奴」と呼ぶ頃にアランの中でペンギーゴに対する怒りが沸いてきたのだろう。もはやそこに敬意は無い。

「でもその間にブリッツたちも処置をしてくれたライフセーバーも…後はライドカーでここに辿り着きました」

アランが語り終えた後、しばらく誰も言葉を発さなかった。やがて、ウッドチャックがアランの肩に手を置いて力付けるように言った。

「ありがとう、よく伝えてくれた。もう大丈夫だ」

その温かい言葉にアランは俯いた。温かいだけに堪えた。

「しかし、このままじゃじり貧だ。ここにはエネルギー源になるのも設備も無い」

ジェイコブの言葉にフリーズは頷いて肯定した。何とかしなければ

町にペンギーゴが襲撃をかける前にマルスが死んでしまう。直接助けを呼ぼうにも、ここからレプリフォースのアラスカ駐屯地は遠すぎる。

「…アラン、レプリフォースでもシティのどっちでも構わない。救難信号を打ってくれ」

しばらく考えてから、ジェイコブは意を決して言った。当然ジェイコブ以外の全員が目を丸くした。思わずアランが真っ青になって立ち上がる。

「それではシグナルを傍受されて救援が来る前にここがバレてしまいます！」

「わかっている。でもこのままじゃいずれペンギーゴが押し掛けてくるし、そうになったら俺達だけじゃどうしようもない。それならいっそ遅くても救援を呼ぶべきだ」

「しかし…」

「奴がマルスの中の情報を欲しがっている以上、今頃血眼で探し回っているはずだ。既にこっちに向かってる可能性は高いんですよ？」

「うつつむ…」

流石に洩るウッドチャックに中年の刑事は力強く説得した。

「幸い今日のサーカスショーは公民館のホールだ。女子供はみんなそこへ行かせて、その間に男達で奴等を迎え撃つ。フリーズ、お前も手伝ってくれ」

「…反対はしませんけど、賭けになりますよ？」

「わかっている。だがこういった時は最悪を想定して動く方がいい」

「なら、自分も…！」

「駄目だ、アラン」

以外にもアランを諫めたのはウッドチャックであった。

「今のお前は私の目から見ても戦える状態ではない！」

だがアランは退かない。

「しかし、村のみんなをそこまで危険に晒すわけにはいきません！」
「アラン、責任感があるのはいいけど足手まといになる方が迷惑だから」

だが見かねたフリーズの冷徹な言葉でアランの頭は一気に冷えた。実際ここに来るまでの間、左足を負傷しているのだ。肩を落とす彼にジェイコブが諭すように言った。

「お前はマルスを傍で守ってくれ。頼んだぞ」

迎撃体制を整えることに決定が為された後、フリーズは暖炉の上に置かれた走り書きに目を落とした。

それを改めて読み、暖炉の中に放り込む。

古いパイプ紙の切れ端はあっという間に燃え上がり、消し炭と化した。

『ちょっと駐屯地まで行って調査ついで機材等を貰ってきます。 B

Y055』

白い雪上を偽装した装甲バンやトラックが列を成して走っていく。いずれも乗っているのは武装した兵士で、中にはサイボーグの兵士までいる。それらが向かう先は第13部隊の駐屯地だ。

「しかもパワードスーツまで持ち出して…」

その様子を小高い場所からシェードは呆れ半分で偵察していた。シャドー以上の隠密性と情報処理能力を備える彼の目に、車内に隠した程度の偽装は通じない。熱源とサスの沈みでそれを見破った。多分、米帝のCIAがカナダ政府軍か。今のアラスカ州兵にパワードスーツを出す余裕は無い。

反乱に乗じたシティへの示威行為…いや、アメリカにシティと表立つて対立する理由は無い。

さしずめ、レプリロイドのサンプル確保か。レプリロイドの国外派遣及び配置には派遣先になる国から総合管理局の内政干渉を危惧する声もあった。

だがそれでも技術は喉から欲しいと見える。実際シティには日本をはじめ、様々な国の技術スパイが潜入している。

「やれやれ、図太いと言うべきか、遅しいと言うべきか…」

私達があれだけ暴れたのに本当に懲りないんですねえ、と苦笑いしながらシェードは双眼鏡をしまった。

「まあ、これで手間が省けるといふものです」

基地にペンギンゴがいきまいが、彼らがぶつかりにいつてくれるならシェード自身動きやすくなる。

そついうわけでそつちは任せましたよ。ジャンク、バースト
おつよ！

任せとけ

頭上を国軍のヘリが通り過ぎていく。

車列を守るように飛ぶそれを薄ら笑いを浮かべて見ていたシェードは、やがて音もなく羽ばたいてその場から姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7994w/>

ワイリー軍団 in 21 x x 年

2011年11月21日20時06分発行